千葉県歴教協
ニュース

# なかま

chibarekkyo@csc.jp

千葉県歴史教育者協議会
楳澤和夫　方
（☎　043-432-0096）
口座番号 00130-7-428373

№454　　2012.9.8

## 歴教協千葉大会を成功させて

＊歴教協全国大会は1200名以上の参加を得て、成功裏に終わることができました。その一端を知らせるべく、本号は大会特集号としました。（M）

## 事務局による全国大会総括

柄澤　守（現地実行委員会事務局長）

□参加者の組織

【概況】　事前申込者497名のうち、県内は82名（8月26日段階）である。総参加者1200名のうち、県内は学生ボランティアを含めて582名で、そのうち会員は88名である。全体会には吹奏楽部員を含めて1000名が参加した。全体会チケットは前売りで274枚売れ、当日券は83枚売れた。学生ボランティアスタッフは56名が登録し、学生交流会には10名が参加した。大野前事務局長のアドバイスもあって、直前に県庁で記者会見を行い（満川・加藤・楳澤・柄澤）、千葉日報・朝日新聞・毎日新聞が記事にしてくれた。「地域新聞」というミニコミ紙にも広告を掲載した。

【評価】　三橋現地実行委員長が掲げた1200名、県内600名参加という目標をほぼ達成したが、それは千葉の参加者の非会員率が85%に達したということでもある。注目したいのは、分科会1日目の新参加者が136名、2日目の新参加者は40名であったこと、つまり分科会だけで当日176名を動員できたことである。全体会チケット購入者で分科会に参加した人も12名いた。分科会が盛り上がったのは、県内で56本のレポートを組織したことと学生ボランティアの参加が大きい。学生・市民など会員の外にも輪を広げたことが「ハードル」を低くし、良い意味で気楽に参加できる雰囲気をつくったといえよう。一方、全体会が成功した理由は、①吹奏楽部の求心力でおそらく200名以上が来た、②会場付近の支部が動員に努力した、③現地見学A～E参加者150人がスライドしたことがあげられる。全体会来場者900名のうち、全体会チケット事前購入者が全員来たと仮定し、当日申込者およびスタッフ数をひくと、残りは412名である。つまり事前申込者497名の83%は全体会に来たことになる。夕刻からの全体会は苦戦すると予想していたが、①事前申込者数の上乗せを追求する、②いわゆるプレコースを充実させる③記念講演＆コラボ企画に地元市民を動員できるものを選定するなど、戦略しだいで参加者を確保できることが証明された。

□全体会

市立習志野高校吹奏楽部が生徒96名、顧問2名の体制で参加し、歓迎演奏をおこなった。選曲、構成はほぼ一任したが、白鳥さんから「牧場の朝」を演奏してほしいという要望があり、挿入してもらった。マーチングあり、ナツメロありの期待通り明るく元気の出る演奏が行なわれ、好評を博した。ユ・ピルジェさんの韓国語による挨拶は、参加者に飛び込みの市民も含まれることを考えると、スクリーンに訳語を表示するなど、もう少し内容を理解できるよう配慮すべきであろう。

高橋哲哉さんの記念講演は、わかりやすくソフトな語り口、明確な論点の整理、新しい情報の挿入など、市民をも対象とした講演としてふさわしい内容であり、分科会での討議とリンクすることもできた。講演者選定まで紆余曲折はあったが、時宜を得た人選だったのではないだろうか。

楽屋話になるが、東京の石川さんと千葉の時田さんの司会が素晴らしかった。石川さんは、入

念に準備して時田さんをリードし、幕間をつないで時間を調整した。PC係の錦織君も緊張でフラフラになりながらがんばってくれた。

□地域に学ぶ集い

参加者名簿によると、参加者数は以下の通りである。①戦跡と文化財を活かすまちづくり（17名）、②将門と古代房総とのかかわりをさぐる（34名）、③戦争の記憶と現代展示（24名）、④太平洋を渡ったあわびダイバーたち（19名）、⑤杉村楚人冠と大逆事件そして3・11（19名）、⑥辛亥革命と千葉の中国人留学生たち（32名）、⑦『ああダンプ街道』その後（20名）、⑧韓国の教師と日本の高校生がともに学ぶ『在日』問題（45名）、⑨近藤一さんに聞く中国戦線・沖縄戦の実相（79名）、⑩教科書問題（37名）、⑪震災被災地東北からの報告（55名）。

合計381名が参加した。ただし、名簿未記入の人も多く、実数は上記数字をかなり上回り、450名くらいではないかと思われる。支部の動員のおかげで各講座の人数が確保され、例年とくらべても参加者数は多かった。分科会後ではあったが、参加者の関心は高く、「地域に学ぶ集いだけ参加することはできないのか」という市民の問い合わせも受けた。

□閉会集会

大会の熱気を受けて近来にない300名の参加者を得た。すぐれた地域実践報告の引力のおかげである。おそらくこの日の参加者の多くは浅尾報告に期待していたと思われ、質疑・討論の時間をとったほうがよかったという感想もあった。日程上ここにもってくるしかなかったが、やはり地域実践報告は全体会でおこなわないと意義が薄れてしまう。

18年前の千葉大会では加藤公明さんが報告を行ったが、その後の実践の到達点をどう理論化するのかが求められる。関連して、宮原さんの『千葉県歴教協のあゆみ58年』も参加者袋に入れっぱなしでは宝の持ち腐れである。

□現地見学

参加者数は以下の通りである。A久留島浩さんと語る新しい歴博近世展示／B安田常雄さんと語る新しい歴博現代展示（48名）、C宮原武夫さんと歩く江戸時代の新田村（45名）、D騎兵連隊と毒ガス学校―『坂の上の雲』を考える（30名）、E大逆事件・管野須賀子「針文字書簡」の謎～手賀沼畔に文人の足跡を巡る（27名）、F払い下げられた朝鮮人―遺骨の発掘と慰霊の跡を訪ねる（46名）、G漁船でまわる三番瀬・歩いてまわる漁師町（34名）、H東京湾岸の古墳群―ヤマト王権とのかかわりに迫る（12名）、I成田空港のすべて―開発・闘争から空の安全まで（22名）、J佐原の町並みと香取神宮（21名）、K・L房総半島の先端から東アジア交流史をみる／東京湾要塞と本土決戦陣地をあるく（30名）。

全体のまとめ役をした前田さんの総括から引用する。「結論から先に言えば、千葉大会の現地見学は大成功だったと思います。その理由としては①計画したすべての現地見学が催行されたこと、②集合から解散までほぼ時間通りに行われ、けが人や病人が出なかったこと、③キャンセルなどを巡ってトラブルが起こらなかったこと、④20名最低催行のところ12名で催行した君津支部も含めて全コース赤字を出さなかったこと、⑤参加者の評価がすこぶる好評だったことをあげれば十分でしょう。成功の理由は、地道な地域の掘り起こしにもとづいた手作りの現地見学が、各支部の周到な下見・資料作りなどの準備のもとに実行されたことに尽きます。……ただ、よいものをつくった自負があればこそ、なぜ参加者がこの数字にとどまったのかという大きな問題が残ります」。

催行が危ぶまれたコースも実行委員会で話し合って実施に踏み切ったが、これも知恵を出し合い内容を充実させるためには必要なプロセスだったといえよう。参加者が予想以上に伸びなかった原因については、①いわゆるプレコースに人が集中した、②首都圏は「いつでもこれる」という意識を持たれやすい、③千葉の見学地は内容が地味である、④月曜出発コースは公共の博物館が休館のため、「目玉」となる見学地を組み込めなかったことなどが考えられるが、今後は非会員も参加しやすい体制をとることを視野に入れる必要があるのではないか。事前申込みの便を考えて、過去に経験のある関西に拠点をおく国際ツーリストビューローにお願いしたが、今回はフットワークの問題でかなり担当の前田さんが苦労した。関東圏で大会を行なう場合、業者選定も考慮すべき

であろう。

□大会運営全般

受付（船橋）、会場（習八・君津）、会計（松戸）、速報（千葉）、運搬（世界・東葛）、書籍（日本史）、物販（香取）、スタッフ弁当（安房）と担当支部を決め、事務局とともに準備を進めた。実行委員会の結集状況が芳しくなかったわりには、細かい点は別にしてスムーズに運営できたと思う。これを支部の力量と考えるか、マンパワーおよび本部と事務局（千葉大職員を含む）による水面下のフォローのおかげと考えるか、である。個人的には後者への依存が大きかったと思う。想定外！の参加者数のために人手が足りなかったことは否めないが、愛知・福岡と前大会を下見してきたわりには、参加者目線での対応が欠けていたのではないか。特に、分科会の会場図が要項その他どこにも記載がなく、受付・案内で泥縄的な対応に追われたというミスは、下見後にきめ細かい打ち合わせをしなかったことが最大の原因だろう。分科会が始まると世話人、報告者、学生は裏方の仕事ができなくなり、大会本部に残った少数の人たちが走り回った。現地報告の本数の多さがここでは弱点となった。一方、全体会チケットでの入場者にも大会要項を配るという参加者目線に立った対応は、全体会の一体感を生み、全体会のみの参加を切り替えて分科会にも参加した人が12名にのぼるという成果に結びついた。

もちろん、参加者目線の欠如は現地だけの問題ではない。たとえば大学分科会は初日午後から開催されたが、何も知らない参加者は当然午前中から来場し、大会本部に問い合わせがきた。サロン的運営の弊害である。分科会の土日開催を継続していけば分科会には参加しやすくなるが、一方で聞きたいレポートだけをめざして来る1日参加者も増えると思われる。くりかえすが現地参加者の85%は非会員なのである。各部屋の外に報告スケジュールを掲示し、レポートを多めに印刷するなど、1日参加者に対する配慮することが急務であろう。

次に、事務局として取り組んだ仕事についていくつか反省点をあげておきたい。後援団体として、習志野市教委の承認を得られたのは、柄澤の勤務する市立習志野高校の校長の後押しがあったおかげである。当初習志野文化ホールの使用料割引（市内団体は半額になる）の交渉をしていたのだが、後援団体になることが前提だといわれて承認をもらえた。割引は承認されなかったが大きなおまけがついた。これに力を得て、千葉県教委・千葉市教委・千葉県とアタックしたが、みな不調に終わった。千葉県コンベンションビューローまで「県教委の後援がないと難しい」と言われた。やはり環境は年々厳しくなっている。コンベンションビューローからは参加者袋をあてにしていたので、急きょ高校の進路室に営業にくる大学に「ちらしを入れる」という条件で袋の提供を受けた。他に、安房支部のつながりを活用して千葉県観光物産協会から後援の承認を得た。交渉するなかで「地域に学ぶ集いと現地見学で町おこしに貢献します！」という売り込みが好感度をアップさせることがわかった。観光物産協会は、袋と観光案内ちらしの確保にも一役買ってくれ、飯岡の復興支援プロジェクトのメンバーが大会に参加する橋渡しもしてくれた。

本部の連絡を密にするため、実行委員会のレジュメを事務局長あてに送信するなど手を尽くしたつもりだったが、やはり漏れはあった。前述の地図の件以外にも、たとえば「海の幸」をちらしの表紙にしてもらいながら、説明が抜けているなどのミスがあった。今後も全体会参加者全員に要項を配布するのであれば、現地企画のアトラクション（今年は吹奏楽）の紹介も復活させるべきだろう。学生ボランティアについては、学生控室をつくるなど、もう少しボランティアとしての一体感を出せる工夫をすべきだった。今回は1人500円参加費を徴収（実際は県歴教協で負担）したが、他の研究会では無料でかつ昼食も出しているところもある。歴教協も未来への投資という視点を持ち、現地対応ではなく、本部として位置づけて取り組むべきではないかという意見が出された。

県の研究集会では好評のワークショップだが、昼休みだけという時間制限と会場のわかりにくさもあり、参加者は20～30人にとどまった。設営が分科会の時間帯に重なったために学生ボランティアの手伝いがなく大変であった。また発表者が分科会報告を担当していたりしてバタバタして参加者と時間的なすれ違いも起こり、企画として無理があったかもしれない。

保育は直前に全体会でも実施することにしたが、2名利用者があった。しかし分科会の利用者は

少数にとどまった。首都圏での大会は周辺に遊戯施設が多いため、需要が少ないのかもしれない。

例年のことかもしれないが、受付では苦情が多く寄せられた。現地として気になったのは、分科会2日目に3000円徴収することが大変厳しかったことである。会員が半数を切る状況のなかで、大会参加費のあり方も至急検討する必要があるのではないか。例えば、「地域に学ぶ集い」のみ参加、「現地見学」のみ参加、会員の参加費割引など、ニーズにあった料金体系を考えないと、せっかくの参加希望者を逃しかねない。

□支部活動の再構築を

他県からうらやましがられる支部活動だが、前述したように現地見学ではその実力を発揮した。旅行業者の支援を受けずに、宿の手配、バス会社との交渉などすべてを支部で運営し、どのコースも参加者から大変好評であった。一方、今後の支部活動を再構築するポイントになる反省点もある。例をあげると、日本史部会は書籍係になり、北田さんに仕事を依頼した。彼は書籍の会場設営の責任者であったが、なぜか県関係の書籍の売り子として、世界部会のメンバーとともに3日間ほぼ売り場に張りつくことになった。その間、日本史部会の会員は誰も交代しなかった。部会として組織的に取り組む意思統一がなされていないのである。こうした事例は他支部でも起きていたことが総括会議でも報告された。ぜひ各支部で大会での取り組みをふりかえって議論していただきたい。また今回、会員以外の方々にレポートその他いろいろと手伝っていただいた。例会で大会の状況を報告してもらうなど、事後のフォローも忘れずにお願いしたい。良くも悪くも大会運営の教訓を今後の支部活動、そして県歴教協の活動に生かすことが重要である。

## 全体会高橋講演の感想

楳澤和夫（日本史部会）

「ある者たちの利益が、他のものたちの生活を犠牲にして生みだされ、維持される」。これが高橋講演のテーマであった。戦後日本の「平和」は沖縄の犠牲抜きには考えられない。つまり、日米安保体制は沖縄を犠牲にして成立するシステムであった。日本復帰後も沖縄には広大な基地が存在し、日米地位協定のもとで、米軍は特権的にふるまっている。つまり沖縄は事実上「植民地」状態にあるといっていい。

福島で育った高橋さんは、この「犠牲のシステム」を福島にもあてはめる。福島県の太平洋沿岸地帯は出稼ぎが多く、常磐炭坑が閉山して以降、原発を誘致することで雇用を生みだした。ここから電力を大量消費する大都市が、便利で快適な生活を享受するために、福島の貧困につけ込んで原発というリスクを請け負わせてきたと言うのである。福島が「植民地」であるかどうかについては議論の分かれるところであるが、「東京」電力の発電所が、なぜ「福島」にあるのかという問いは重い。

『靖国問題』（ちくま新書）で、国家と犠牲の問題を追究した高橋さんだったが、それが「システム」として現代の日本社会で機能していることの問題性を明らかにした。重要なのは、「ある者たちの利益」の「ある者」のなかに、「自分」が入っているのではないかという自問である。

□分科会感想

「日本前近代」分科会

若杉　温（日本史部会）

例年に負けず、本年の日本前近代でも、実物教材や絵画史料の活用、討論授業の展開、神話の教材化、地域教材の開発など、多彩な授業実践の試みが発表された。その中で、特に注目されたのは、ともに同じ『凞代照覧』という近世後期の江戸の町を描いた絵画を教材化した新潟の小林朗実践と千葉の渡辺哲郎実践である。

『凞代照覧』は1999年にドイツで発見されたもので、日本橋や三井越後屋前などに集う多様な身分・職業の人々を具体的に描いて、江戸の町の成熟した姿を多彩に表現したものである。表題の『凞代照覧』とは「凞（かがや）ける御代の勝（すぐ）れたる大江戸の景観をとくとご覧あれ」という意味で、近世後期の江戸の繁栄を描くことがこの絵画の目的であったことは間違いない。しかし、制作者や注文主などこの絵画に関する詳細はまったく不明で、具体的な制作動機もわからない。

小林実践は中学での実践、渡辺実践は高校での実践という違いがあるが、ともにこの絵画の中の三井越後屋の周囲を描いた部分を教材化している。越後屋は現在の三越デパートの前身だが、近世を代表する有名な豪商で、その店先には江戸の町の中でも特に多種多彩な人々が集まり、一種の社会的“磁場”（吉田伸之の言葉）として機能した。『凞代照覧』はあまりの大作で情報量が豊富なため、どこの部分を切り取って教材化するかという点が、まず授業化の第一歩となる。その点で偶然だが、両実践が同じ越後屋付近の部分を教材としたのは興味深い。両実践がともにこの部分に注目したのは、越後屋の“磁場”としての機能から、江戸の町の成熟を、そこに集う人々の姿から視覚的に具体的に学ぶことができるということだろう。

次に授業化のために問題となるのが、この人々の姿に注目させた点である。小林実践では最初に絵を見て自由に「変だ」と思うことを子どもたちにあげさせている。それによって子どもは自由に色々な観点でさまざまな事実を発見し、それに対する自分の意見を生き生きと述べる。あくまで現在進行形の授業で、今回はここまでで終わった実践だが、次回以降の深化を期待させるものだった。

一方、渡辺実践ではこの「変だなぁ」探しはしない。その理由は以前にこれをやって建物や道路など人物以外のことで随分意見が出てしまい、それはそれで興味深いものがあったのだろうが、収拾がつかなくなってしまったという。それで人物に子どもの関心を集めるため、最初から「この絵に描かれた人物のうち、ハッピーなのは誰か、そしてその理由は何か、説明せよ」という発問を導入とした。そして、この発問は導入とともに、渡辺実践の核心の発問でもある。というのはこの「ハッピーな者」探しで子どもは班別に実に多くの意見をあげるが、そのうち、そもそもハッピーでない人間がこの絵にいるのかという疑問が子どものつぶやきで聞こえてきて、そこから渡辺はではそもそも「この絵にアンハッピーな者はいるのか、いないのか。」という問題を子どもに考えさえることを思いついたからである。一見、非歴史的な発問に思える発問だが、この発問には江戸時代の歴史や社会についての評価を問うという意図が明確で、優れて歴史的思考力を養うものであると思われる。

この渡辺実践については『歴史地理教育』にも発表されているので、詳しくはそちらを見て欲しいが、一つ気になる点をあげると、これだけで子どもが江戸時代が理解できるとは考えていないと渡辺が述べたことである。確かに江戸時代の学習課題がすべて取り上げられているわけではない。しかし、では江戸時代の授業を政治史を中心に時系列に並べるオーソドックスな単元構成ではたしてトータルな江戸時代像を子どもは自ら描き出せるのだろうか。もちろん授業時間の制約は厳しい。だがそれだからこそ渡辺実践のような総合的な歴史認識を問い、育てるような授業が望まれるのではないだろうか。そのような意味で、渡辺には自己実践の位置づけの明確化を再度、検討して欲しいと思う。

「世界」分科会

山本晴久（東葛支部）

例年よりも数本多い10本の報告があり、テーマのまとまりに対応して設けられた3本の柱を軸に展開された。第1の柱、東アジアとの交流をどう学びどのようにつくるかについては①在日の問題についての授業、②フィリピンの革命指導者から見た孫文像、③孫文に共鳴しアジアの連帯を唱えた宮崎滔天の思想が北部九州という地域においてどう形成されたのか、について報告があった。討論では、アジア主義をどう評価し現代の課題につなげていくか、また「地域」から世界につなげる、というときの「地域」の扱いについて、などの意見が出された。

今回大会ではすべての分科会で震災・原発事故に関連したテーマを扱うということで、④戦後史において被爆国である日本がなぜ原発を受け入れたか、を考えさせた世界史Aの実践が報告された。限られた時数の中での実践であったため、日米関係や原子力に関わった科学者のとらえ方が一面的ではないかとの指摘があった。また、他の原発にかかわる実践も含めて、教師側から脱原発の結論を押し付けることは是認されるのか、との正答主義の克服にかかわる問題提起もあった。

第2の柱、近現代世界の実相をどうとらえるか、については、⑤絵や写真などの図を活用した西部開拓と北米先住民の授業、⑥2001年のダーバン宣言を切り口にシェラレオネやリベリアの貧困を考える授業、について報告がなされた。ともに生徒の主体的な学びを通して、現代の問題の直接の原因となっている欧米世界の拡大の矛盾を問うものであった。

第3の柱、教科書分析、グローバルヒストリーなどさまざまな手法や視点を手がかりに歴史認識をどう深めるか、については、⑦地域の教材化によって知的障害を持つ生徒の歴史認識形成をはかった授業、⑧グローバルヒストリーを取り入れた中学校歴史授業の取組み、⑨朝鮮戦争の記述を通した各国教科書の比較、⑩各時代に設定された日本の進路を問う設問を通して歴史的思考力の育成をはかろうとした世界史Aの授業、などの報告があった。グローバルヒストリーについてはまだ検討がなされて間もないことから定型はないものの、一国史観やヨーロッパ中心史観を脱却し、それぞれの地域の歴史を世界システムの中にどう位置づけていくのかといった視点が必要である、また、生徒に判断を問うよりも、ある意味徹底した「教え込み」によってその歴史認識のレベルを上げることの方が重要なのではないか、などの指摘がなされた。

「憲法と現代社会」分科会

関山美子（千葉県民主医療機関連合会ソーシャルワーカー部会「9条の会」小委員会）

この度、縁あって千葉民主医療機関連合会（以下、千葉民医連）として初めて大会および分科会に「レポート発表」という形で参加する機会を得ました。実は発表を終わるまで「門外漢の参加で分科会の趣旨に合わなかったらどうしよう！」という不安でいっぱいでした。けれども、討論の中では「千葉民医連ソーシャルワーカー倫理綱領＝ともに伝え合い、ともに学びあい、ともに取り組み、ともに育ちあう＝を、子どもと教師の関係に置き換えても、十分に活用できる。素晴らしい文章に出会えた」「初めて民医連が参加をした……千葉から新しい風が吹いた」などの発言をもらい、ほっと胸をなでおろすと同時に、現代社会において、憲法（取り分け9条・13条・25条）を守り抜くたたかいは、分野や階層を超えて全国民的な課題になっているのだということを再確認できました。

他に、印象に残った点をいくつか挙げておきます。

1点目は、教科書問題に関して、「さらっと読んだら、一般の人々には、どこがどう違うのかわからない、むしろ『育鵬社』の教科書のほうがわかりやすいととらえられてしまったら、運動などは起こせなくなってしまう。教育とは何かの原点に立ち返って、自分たちが何を伝えていくべきなのかを追求していくことが大切なのではないか？」という発言から、言葉で伝え合い歴史を正しく認識していくことの重要性を改めて強く感じました。

2点目は、「平和教育とは、意識的に計画し実行していかなければ消えてなくなるものかもしれない」「だからこそ、それを守るたたかいと実践」が今求められていると感じました。例えば、修学旅行の計画に

しても、下見の出張費が出なくなった昨今では、旅行会社に丸投げで簡単にディズニーランドツアーなどが決まってしまうといいます。今回の報告では、事前の数回にわたる学習会から、沖縄で何を学ぶのかを子どもたちに考えさせるという実践内容で、逆に「頑張ればできるんだ」という事実を教えてくれたと思います。

3点目は、子どもから高齢者まで、この国の「貧困問題」は深く広く広がっていることが実感でき、本分科会のテーマの意味の深さを感じました。

私たち民医連でも若い世代に、どうやって憲法9条や25条を守ることの大切さを伝えていこうか、日々悪戦苦闘をしているところですが、だからこそ、業務保障ですでに数百人の仲間が全国から「辺野古支援」に参加したり、「SW9条の会」で学びあったり、「生活保護バッシングを許さない声明」を出したりしているのです。

世の中を見渡したら、いかに多くの「憲法違反」が蔓延していることかと、特に最近は強く感じます。今回のような取り組み（テーマ）が、今後も継続されることを願っています。

「現代の課題と教育」分科会

榎並　智（千葉支部）

私が学生だった頃に経験した「セツルメント活動」を題材にレポートをした。19世紀イギリスを起源に、関東大震災後東京で展開されたわが国の学生セツルメントの流れを汲みながら、第二次大戦後、千葉に根を下ろし「寒川セツルメント」と称した活動の歩みを雑駁に綴ったレポートである。正直なところ、今日的な問題提起の視点が希薄な内容であり、はたして「現代の課題と教育」分科会のテーマに相応しいのか不安を抱えての参加であった。

聞けば、第7分科会はかつて同和問題を主課題に議論を深めていたそうな。部落差別に止まらぬ広範な人権課題を対象とするのならば、教育を取り巻くあらゆる課題がテーマとなりえ、内心ほっとした。しかし、次々と報告される内容に真剣に聞き入るにつれ、緊急喫緊の課題と正面から格闘している方々のようすが伝わってきて、やはり場違いだったかなあ、との思いは消し去りようがなかった。

都合により、第1日目のみの参加だったが、その第1の討議の柱が「震災後を生きる」とされ、4本のレポートが報告された。宮城で生の言葉を取り集めたドキュメンタリー映画制作に携わった実践。福島の実態と13年前のJCO事故以来の東海原発に内在する危機の告発。泊原発に近い工業高校での福島を題材にした時事的学習の上にエネルギー問題への思惟を生徒たちに投げかけていく実践。さらに千葉県旭市をも襲った3・11大津波のメカニズムと被害、支援・防災教育の切実な報告。生き死にに関わる重い課題についての報告が次々と行われ息をも呑むようでさえあった。

第2の柱「千葉に大いに学ぶ」では、自らの体験をも含め安房南高校とウガンダとの20年来の交流を丁寧に報告した学生さんに、会場の空気が華やいだ。若さはまぶしい。

私は「千葉における戦後学生セツルメント活動」と題し、緊張のあまり饒舌になりつつ時間一杯報告を行ってしまった。うれしいことに、拙いレポートに対し、評価と疑問と両面からの議論をいただけた。片や、学生セツルが時代とともに変質しつつも、その基礎に学習活動を堅持し社会性を保つことこそに価値があるとする論。一方、変質しながらも今もその活動が継続しているのは、学習とは別の面に意義を見出したからだろう、との指摘。「現代の課題と教育」に迫れたとは思わないが、今後セツル史を発掘していく上での大事な視点を示唆してもらい、ありがたかった。

「農業・食糧・食育」分科会

瀬尾　誠（千葉支部）

分科会報告は、予定していた6報告が都合で4報告となったので、分科会は一日となりました。分科会の出席者は、学校現場の教職員と生産者の6名で多くありませんでしたが、理由はわかりません。分科会では、農業の現状を出し合い、学校や農業の現場で農業や食糧や食育をどう守り伝えていくかを交流しました。

開催地千葉の生産者で農民運動千葉県連合会会長の大木伝一郎さんから、人を良くする「食」と農業が危機状況にあるけれども、千葉県では地域農業を活性化するために、学校給食や農産物直売所で地産地消の取り組みで成果をあげており、食の安全と食糧自給率向上を宣言した匝瑳市のさまざまな取り組みを農家が推進してきたこと、生産者団体「千葉県農民連」が東日本大震災による被災農家の救援対策や原発事故による被害対策や米の安定確保やTPP参加検討の中止を求めて取り組んでいることが報告されました。

千葉の会社勤めを早期退職して福島で田舎暮らしを始めた瀬尾から、東日本大震災と東電の原発事故により避難生活を強いられているが、多くの方々のご支援とご理解のおかげで自然に恵まれた長野で農のある田舎暮らしを再開できており、日本の農村の高齢化と農業の後継者不足は危機状況にあるけれども、日本の農業が多面的で重要な役割を担っているだけでなく、世界の食糧事情からも自給率向上が求められている下で、農村の自治体ぐるみで都会の人々を農村に迎えて農業を続けていく取り組みの意味を報告しました。

秋田の渡部豊彦さんから、日本の小学校の3～6年で教える農業と農村の姿は、米づくりが年貢や地租として農民を苦しめ、農業が日本の発展を支えてきたとなっていて、農民が貧しく農村は暗いという印象を持たせるものになっているが、地元の秋田県三種町鹿渡で児玉伝左衛門の書いた江戸時代後期の農業技術書『試験田畑』を教材にした、江戸時代の郷土や農業のようすを考えてみようという授業では、郷土と暮らしを豊かにしようとしてきた先人のことがわかり、活気があったと思うようになったという生徒の感想が報告されました。

三重の横田はるみさんから、東日本大震災の被災地の小学校からの手紙をきっかけにして、東北の小学校の子たちはちゃんと給食を食べているか、農林水産食品加工業は仕事ができているかに思いを馳せ交流する中で、東北の郷土料理の「おくずかけ」と笹かまぼこを給食献立にリクエストして、豊かだった東北の農林水産業や食材の安全を守る取り組みのことや復興のためにできることや食べることの意味を考えるようになった、食育の取り組みが報告されました。

## 「平和教育」分科会

神山知徳（日本史部会）

平和教育分科会は参加者約70名と大盛況でした。

初日は7本のレポートを検討しました。神山報告は2001年度以来取り組んでいる祖父母などからの聞き取り調査実践でした。聞き取り調査は小学校では比較的よく取り組まれていますが、中学校ではほとんど実践されていません。

平井報告は、立命館大学国際平和ミュージアムで開発された貸し出しキット「ピースキット」を使った実践報告でした。加害の意識も持たせうる教材として作製されたのが慰問袋でした。その中でも慰問の手紙にどのようなことが書かれていたかを知ることで、戦場と学校を繋ぐきっかけを与えることに成功しています。

大八木報告は、ともすれば日清戦争や日露戦争を、欧米の植民地支配に対抗するやむをえない戦争であったと評価されることも多い、自国中心史観を克服することを目標としていました。歴史認識の違いや誤解が日本・中国・韓国それぞれの生徒の間にあることを、どう克服すればよいかを考えさせています。

安達・立川・吉野報告は、2003年の都教委通達以来たたかわれている「君が代・日の丸」強制

反対闘争の経過を報告したものでした。教科書の記述上の問題でいえば、「君が代・日の丸」問題については、教科書で比較的詳しく記述されていますが、それが可能になっているのは、こうした裁判闘争の経過が新聞紙上で明らかにされているからだそうです。

池田報告は、東京湾要塞・本土決戦・直接軍政など忘れられた館山の歴史を掘りおこし、授業実践の提唱や、市民による戦跡の保存運動を行っているNPOの精力的な活動を報告したものでした。

吉池報告は、「従軍慰安婦」を知らない生徒にどう慰安婦問題を伝えるか、生徒の疑問を軸にした授業実践を検討したものでした。特に印象的だったのは、この実践に批判的だった団体のメンバーによって誹謗中傷の張り紙がされたことでした。

森報告は、これまでの「平和」教育（戦争学習中心、戦争一般）に欠けているものは何かを強く意識した実践報告となっているのが特徴でした。「次代の主権者にふさわしい、真実を見抜く眼」を持つ授業として、1時間で戦後の核の歴史を扱っていました。

二日目の報告については、参加しなかったため割愛します。

「幼年・小学校低学年」分科会

山嵜早苗（千葉支部）

本分科会への参加は、北海道大会・北九州大会に続いて3回目である。愛知大会では、小学3年生の総合学習のレポートを発表したので、まだ、参加回数は少ないのだが、低学年の実践経験豊富な世話人の方々と親しく交流することができ、大変よい刺激を受けることができた。

今回、私は、大学の「飼育栽培」の授業から「いのちを学ぶ―獣医師と一緒にふれあい授業」をレポートし、保育士や幼稚園・小学校教師を育成する3年制の短大の授業や学生のようすを紹介した。幼児教育や小学校低学年の生活科の中で、飼育栽培活動の意義や必要性は、誰もが認めるところであるが、学校現場の現状としては問題が多い。担当になる若い教師自身が飼育体験をしておらず、指導できていないことが多い。週休2日や長期休業がある学校で動物を飼育する困難さ、鳥インフルエンザやアレルギー、出産や死亡、病気などの問題は、生き物を扱う難しさから生活科での活動、中高学年の委員会活動における飼育活動をともに停滞化、減少化させてきている。

私自身が飼育の授業を行う上で参考にしている全国学校飼育動物研究会の活動を紹介しながら、獣医師から動物との係わり方を直接教えてもらう授業を行った。

大学の隣の小学校の教室とウサギを借りて、獣医師が自宅から連れてきてくれたチャボを学生たちが抱き方を教わりながら抱く体験をした。怖いと思っていた動物のほうが人間を怖がっているという逆転の事実、優しく抱くと目を細め、うとうとするようす、聴診器からドクドク聞こえる命の鼓動など、学生たちのレポートに、それぞれが動物とのふれあいで感じたことや自分がめざしたい飼育活動が溢れていた。

参加者からは、やはり飼育担当者の苦労話やたまごっちで生命をゲーム化する問題、子どもの作文からわかった飼育活動を通した子どもの変容、カイコを育て続けているうちにカイコの変化とともに子ども自身が癒され、学級が落ち着いてきた話、親バトが子どもに必死で餌をやる姿を観察したことなど、さまざまな経験談が出された。

一番の課題は、学校の中で良い状態で飼うということであり、飼い続けることにより愛着が湧いたり、動物の誕生や死の体験が人間の生死にも繋がって認識できるようになったりすることが大切なのだと理解した。

兵庫の中野さんから、野生の鳥をもっと観察させる必要性があること、餌を食べて種を播いてくれるようすを知るなど、教師の目をもっと育てること、埼玉の浦沢さんから、合鴨を1年半育てていたときの学びなど、豊かな経験が語られた。

参加者の中には、自分の飼育活動を反省し、学校飼育動物研究会の夏休みワークショップに参加し

たいという声もあり、今回提案してよかったと思った。

「小学校3年・4年」分科会

三箇昭子（千葉支部）

今回の全国大会では、小学校中学年の分科会でレポートを発表した。「風呂敷は世界をめぐる―ケニア・韓国・トルコ・ブータン-」というテーマで、日本で伝統的に用いられてきたふろしきと世界の布の共通点やつながりを考えた総合的な学習の時間の実践を報告した。

分科会の中では、全国から来た先生方から意見をもらうことができた。風呂敷を実際に子どもたちが使ってみたこと、ケニアの方をゲストティーチャーに呼び授業をしたこと、日本と世界の布を比べてみたことは良かったという意見だった。

しかし、千葉集会でも指摘された「地域とのつながり」が見えない点がここでも指摘された。地域に風呂敷を扱う店があったらそこを訪ねたり、地域に住む外国人を呼んだり、子どもたちの住む地域とつながりが持てるとよいのではないかという意見であった。私自身、授業を行いながら悩んだ点でもあり、いきなり子どもたちの前に風呂敷が提示される形になってしまったことが反省点である。この授業実践の4カ月後くらいに地域の博物館に「昔のくらし調べ」の社会科見学に出かけた。そこで風呂敷包みが展示されており、それから授業に入ってもよかったかもしれないと考えた。

また、つながりとはどういうことかという意見をもらった。私は、比べてみることで日本と世界の似ている点、同じだと思った点を「つながり」と考えていた。世界の中で人が同じようなことを考え、物を使っているという意味でのつながりである。しかし、実際に交流があって、伝わってきた「つながり」とは言えないのではないかいう指摘であった。韓国と日本は、お互いに影響はあったのかもしれないが、その他の国は実際のところはわからないので、確かにそういう意味でのつながりがあるとは言い切れない。

「小学校5年」分科会

板垣雅則（浦安支部・日本史部会）

自分は今年6年の世話人と5年の発表を兼ねていたので、どちらも中途半端な参加になってしまっていた。今回は1日目の午後の私のレポートと次の大阪・河崎かよ子さんのレポートを中心に紹介したい。

私のレポートは、低線量被曝をどう考えるかということで、楽観論者（100mSvしきい値あり論者）として中川恵一氏を、悲観論者として児玉龍彦氏の議論を紹介した。ただし、児玉氏の議論を内部被曝としてではなく「100mSvしきい値なし論者」として紹介した。議論の中では「内部被曝と外部被曝を同列に扱ってよいのか」という疑問が出た。こういう疑問が出るところが歴教協らしいし、報告してよかったと思える部分だと思う。私は「私個人としては外部被曝と内部被曝は違う、と思っている。しかし、それを言ってしまったら議論が成立しない。あの安斎郁郎氏も基本的には内部被曝を考慮せずに考えているのなら、こういう議論の立て方も『あり』ではないかと思う」と答えた。他にあった議論としては、この事故によって生産者の生活に想いが行くような授業、例えば「自分の祖父が育てた大根をわが子に食べさせたくない」といった人々の葛藤に迫れるような授業が構想できるのではないか、というものがあった。この辺りは今回到達できなかった部分であり、次の機会では克服していければと考えている。

河崎さんの報告は5年生の国土の学習をどうやってつくるかというものだった。報告を聞いていてなるほどと感じさせられたのが、資料の提示の仕方である。北海道の幌加内について考えさせる上で4つのグラフを出す。人口・農家・学校、これら3つは減少しているのに対し、ソバ畑の面積だけは増加している。そこに驚きがある。さらにソバ畑の面積は増加しているが、全体の耕地面積自体

はほぼ変化なしという状況を示す。なぜ?と疑問を喚起させる手立ての工夫が参考になった。
　河崎さんのお話の中で「人の姿に焦点を当てるようにする。何をしているのか、何を考えているのか。そういった生産者の意識が明らかになる授業にしたい」というものがあった。そしてそれがわかりやすく示される、そんな授業づくりの方法を継承していきたいと思う。

「小学校6年」分科会

島　重明（船橋支部）

　久しぶりの千葉大会というので、報告も引き受け全国各地の実践が聞けることを楽しみにしていたが、都合で全体集会と分科会1日目の午前中（講座と自分の実践報告）しか参加できなくなってしまった。会場では若い教師の報告（4本）が予定されていたが、残念ながらレポートだけをいただいてその討議には参加できなかった。
（1）講座―「洛中洛外図屏風」から戦国時代の京都の町を学ぶ
　まず、千葉支部の平野さんから、国立歴史民俗博物館（歴博）に来館した希望校に実施している45分間の「歴博プログラム・読みとき洛中洛外図屏風」をまとめた実践の紹介があった。現在の教科書を見てみると、「日本の伝統と文化」ばかりが強調されていて、民衆の暮らしが欠落しているとの指摘があった。この「洛中洛外図屏風」を見ていくと、公家や武士などの支配者だけでなく、僧侶、承認、農民をはじめ庶民も多数描き込まれていることがわかる。例えば、米俵を担いでいる牛を発見すると、そこから道具―生産者―商人・武士階級へと読み解いていくことができる。子どもが主体的に活動する切り口として使うことができると言える。「絵画資料からその時代についてのさまざまな事実を読み解くことができる」「楽しく体験してほしいと願いながら実践をしている」と、平野さんは述べている。私も、歴博のスタッフとしてこのプログラムを教わりながら、「洛中洛外図屏風」の魅力に引きずり込まれていくようだ。さらに多くの子どもたちが歴博を活用し、絵画資料の読み解きのおもしろさにふれて欲しいと思った。
（2）実践報告「日本と朝鮮の歴史をふり返って―子どもたちが考える拉致問題」
　私が退職直前の社会科授業で、これまで取り組めなかった現代史に挑戦した。そして、三橋さんと遠藤さんがこの授業を見に来てくれて、子どもに疑問を投げかけてくれたことがおおいに刺激になった。また、実践報告を作成するにあたって、千葉支部のみなさんから率直な意見が聞けて、このように「拉致問題」に集約した形で報告できたことに感謝したい。この分科会では、この報告が、「子どもたちが持っている偏った認識に挑戦する実践」「事実をつきとめようとする取り組みと、人と出会うことが、確かな認識につながる」として概ね好意的な評価を得ることができた。歴史学習を戦後史からスタートしているという私立の小学校があったが、現代史をどのように扱っているのかもっと実践交流があってもよかったと思う。

「地域の中の子どもたち」分科会

野口靖子（松戸支部）

　大会レポートをこの分科会で提案することになり、初めてこの分科会の存在を知った。
　レポートは4本、参加者は8名だった。小橋正敏（千葉）「東京インドネシア共和国学校を訪問して」、江崎広章（千葉）「なぜ50時間以上も意欲的にまなんだか」、野口靖子（千葉）「地域の子どもまつりと放射線ホットスポットでの活動」、羽生和夫（岐阜）「地域のお年寄りとのかかわりを大切にした学校づくり」。
　分科会の経過説明があり、学童のこどもたちのこと、学校づくり、地域と学校などさまざまな視点から子どもや教育について考える分科会のようであった。
　私はこの分科会の中で小金原地域で26年間続けてきた「小金原子どもまつり」の紹介と3・11に伴う福島原発事故による地域のホットスポット化について報告した。年に1回の手づくり遊び中心のまつりが

26年間も続いていることや月1回のミニまつりは学校の施設（体育館）を使っていることなど評価されたようだ。ホットスポットについてはあまり話題にはならなかったが運動会のようすなどから学校のちぐはぐな対応などが理解されたようだった。

レポートのうち江崎さんのレポートは小学校中学年の分科会で論議した方がより深まったのではないかと思った。教材と子どもの発想と探究心そのことが大事にされ、教室の中で保障されなければできない授業だと思う。

この分科会そのものはいろいろな角度から子どもや教育、地域について考えていけるおもしろい分科会だと思うし、そんな討論になって個人的にはよかったと思う。また、退職者が増えていく中で地域でのさまざまな活動がレポートされると良いと思う。そのためにも、もう少しこの分科会の宣伝およびレポートの発掘が必要だと思う。現に退職者の中には「参加する分科会がなくて」という声を聞いた。

## 「高校」分科会に参加して

北田邦夫（日本史部会）

本年度の高校分科会は「①東日本大震災・原発問題と高校生、②新学習指導要領をどう見るか、③高校生の学びと地域・世界」について議論するというのがテーマであった。今回の千葉大会では現地実行委員として書籍販売に常駐しなければならず、私の実践発表をした2日目の午後しか分科会に参加できなかったので、発表は愛知・同朋高校の松田浩史「学び合う沖縄学習―『ひかり』を見いだす平和学習」と東京・筑波大学付属駒場中高の山田耕太「生徒が語り合える日本の近現代史の授業」の2本の報告しか聞けなかった。そこで今回はこの2本の報告について述べたいと思う。

まず同朋高校・松田さんのめざされている授業とは、まず第1に実物教材や顔の見える証言教材をもとにした「生徒が『参加』できる授業」、そして第2に答えが一つでない問題について、その状況を整理し、多面的な考えを共有する中で考える力を身につけること。そのために「個人の意見をつくる→小グループでの討論→各グループでの話し合いの共有する」の2点を満たすものである。この学園では元日本兵の近藤一さんの加害体験や宮城喜久子さんの沖縄戦の体験を生徒に聞かせるなど、平和教育にたいへん力を入れており、しかもその平和学習が国語科・英語科とタイアップした修学旅行の事前・事後学習に有機的に取り入れられており、生徒の学習後の感想も「これからしっかり自分たちができることを考えたい」というようなものが多く、すばらしい取り組みだと思った。しかし、タイトルの「ひかり」とは、松田先生曰く「平和学習は暗い側面が多いので、生徒にできるだけ明るい展望をさし示したいという意図から、この『ひかり』という言葉を使った」のだが、なぜこの実践報告にこの「ひかり」という言葉を使ったのか、その意味がもう一つわからなかった。おそらく生徒の学習後の感想の「これからしっかり自分たちができることを考えたい」という態度に「ひかり」が感じられたという意味なのであろうかと私は解釈した。

東京・筑波大学付属駒場中高の山田先生の「生徒が語り合える日本の近現代史の授業」は、すでに一定の水準以上にある筑駒の生徒の力をいかに伸ばすかを考えたところ、「多様な価値観を尊重し、多様な立場の人の事を想像できる態度を身につけさせる」こと、そして「歴史修正主義」の主張をする生徒が目立つ筑駒の生徒に対して、恣意的な歴史物語を相対化させ、史実に生徒自身がアプローチし生徒同士で議論する中で疑問を解き明かしていく機会を設ける必要があるということで、生徒が興味を持ったテーマについてグループで調べ学習をし、発表と質疑応答を行う授業の実践報告であった。しかし生徒は戦争体験談や証言などについて「それは特定の個人の歴史体験で、マクロから見た歴史観、すなわち公平に歴史を見る立場ではない」として、あくまで歴史修正主義の歴史観をも入れることが、歴史を偏りなく見る立場だと思っているような発表が目立ったと報告されていた。

私は2008年度の東京大会でもこの分科会で発表したが、高校分科会は毎年多彩なテーマの実践が報告される。私ももっと多彩な観点を入れた新たな授業づくりに取り組まなければならないと、この分科会にまた参加して改めて思った。

## 「大学」分科会

大野一夫（船橋支部）

全国大会の参加は、1973年の愛媛大会以後40回目となるが、分科会に参加して報告するのは、7年ぶりであった。

私は、1日目午後に「社会科教育法において、授業実践力をどう培うか」を報告した。「社会・公民指導法」（昨年度、東洋大）の概要と学生の授業に対する認識の変容を探り、授業観の変化、今後の課題などを提示した。私の教育の仕事も終りに近づいているので、授業の全容（シラバスと毎回の内容）と授業スタイル（教材研究・子ども研究・授業方法をつなげ、学生相互の学び合い）を提示するようにした。授業で扱った実践事例は、これまでに残してきた実践や記録（ビデオ録画）を中心に、今の社会現象なども取り上げてきた。なお、『講義通信』の冊子と、授業後の取り組み（フィールドワーク、教採の取り組み、新採教員に発信している『Web通信』）を紹介した。

討論では、大学の指導法授業をどう進めているかの意見交換、学生の実態、授業記録の取り方、模擬授業の実際などが話題となった。私の報告では、学生の授業に対する認識の変容を追跡したが、「実践力を身につける」とは学生たちがどういう力をつけたときなのかを議論していただき、課題も見えた。また、来年も、大学における実践力をどう育てるかを追究していくことになった。

2日目は、午前中に「大学生と原発をどう教えているかを考えて」（満川尚美）と「学び合う大学の授業―原発再稼働を考える」（山田麗子）の報告から、大学での原発の授業が討議の中心になった。満川報告は、「教育課程論」で、原発事故を特活・総合などの分野で行った模擬授業の事例を紹介した。学生が自分でわかっていく過程が大事だという。山田報告は「社会科教育論」でのディベート風実践である。学生は、原発再稼働について生存権と景気・就職の間で揺れていることがわかったという。討論では、学生が用意するべき資料、文科省の副読本の問題、命・人間の視点が大事ではないかなどが出された。

2日目午後は、「NPO、教育委員会、教職大学院の連携をふまえたESD教員研修について」（魚山秀介）、多摩市ESD教員研修を事例にした報告が行われた。ESDとは、「持続可能な発展のための教育の10年」である。教職大学院と多摩市の共同研修で、学生は学びの質を向上させる契機となっているという。討論では教員の質の向上をめざす文科省の施策、他大学でも行われているESDの取り組みなどが話題となった。

## 「社会科の学力」分科会

青木孝太（法政大学院生）

社会科の学力分科会では、以下計6本のレポートがあった。

白尾裕志報告「総合的な学習の時間―種子島のサトウキビ」（小学校5年生）および大見功報告「確かな歴史認識能力の形成をめざして（小4）社会科『昔のくらし』の実践を通して」は、ともに小学校高学年の実践であり、（生産）物とそれに関わる人々に着目して、討論へと至る実践である。白尾実践は、サトウキビの生産過程に焦点を絞り、その生産方法から価格の決定に至る過程を生徒たちに認識させ、彼らをTPPに関する活気ある討論へと導いている。大見実践は、身近にある遊びと道具の今昔を比較させることによって、より総合的な見地から討論へと生徒たちを誘っている。物に着目する点からともに出発しつつも、その討論過程と内容の相違のうちに、両実践および教師の特異性が現れていたといえる。全体討論では、両実践は、科学と生活を接合していく実践であるという議論がなされていた。

和田悠報告「加藤公明『考える日本史授業』とは何か」および青木孝太報告「加藤実践における主体形成」では、ともに加藤実践が論じられた。和田報告は、すれ違いで未完に終わっている今野・加藤論争のそのズレを1992年の歴史的な状況のうちに位置づけ、2000年代以降の歴史学と

歴史教育の関係の変遷の中では、改めて加藤実践を再評価する状況とその必然性にあることを論じていた。青木報告は、「主体性」という概念をフーコーの理論に基づいて、論理性・実証性・個性という「規範」に従うことと捉え、加藤実践の主体形成を論じていた。全体討論では、問題点として、和田報告に関しては、安井実践と加藤実践との関係が、青木報告に関しては、「主体性」と学力との関係があげられていた。

二日目の、佐々木勝男報告「岩手大学における特講10年のあゆみ」では、正確な情報収集に基づく資料と世界各地に自分が実際赴いた写真などの資料を提示することによって、佐々木さんが学生たちに教えることの魅力の一端に触れさせる姿が垣間見られた。

前田賢次報告「原発の授業をどう構成するかについてのメモ」は、これまで原発問題を扱った実践を、科学的知識の提供に重きを置くもの、環境教育を中心にしたもの、幅広く扱ったものの三つに整理したうえで、身近な電力や原発・放射能の問題から子ども自身の要求に根ざした授業の展開が重要であると論じていた。

本分科会は、6本というレポートの本数と終始10数名の参加者ゆえ、全体として緊密なムードと議論がなされていたことに特徴があった。

## 「授業方法」分科会

三橋昌平（千葉支部）

今回「2年間にわたって昆布を追求した子どもたち」の実践報告を終えて、学習における素材の重要性を再確認した。昆布を題材にして、江戸時代の流通や近世東アジアにおける日本の対外関係の広がりを子どもたちとともに学習していったが、昆布という素材をもとに、子どもたちの疑問を中心にして学習を進めた。その中で手紙を送ったり、博物館に行ったりすることで疑問として出てきた子どもたちの思いを受け止め、疑問を解決していけたことが今回の成果であると考える。本分科会では、以下のようなことが討議された。

まず、導入で「沖縄では昆布がとれないのになぜ消費が多いのか」という学習問題を設定し、この問題から出た疑問点を手紙にして解決の糸口としたことである。子どもたちの疑問から出発し、手紙などにしたことで子どもたちの意欲も高まり、子どもたちの姿がよく見える結果となったのではという意見をもらった。私自身も手紙を送るということが、学習を進める大きな役割を果たすということを感じた。手紙にして相手とやり取りをすることで、自分の考えを整理し、外に発信することができ、とても効果的であった。レポートやカルタづくりを通して、根拠を示して自分の考えを述べる力が育ってきた。また、クーブイリチーを導入で紹介したことで興味を引きつけられたのではないかという意見ももらった。

次に昆布が沖縄で浸透した理由について討議された。近世東アジアにおける日本の対外関係の広がりという観点ではなく、人々のくらしという視点である。「浸透した」と言えば一文で済むが、そこには人々のくらしがあらわれている。私自身の調べが足りなかった部分でもあり、子どもたちと調べを進めていっても興味深いと思う。

最後に内容の妥当性である。今回は沖縄を中心として、近世東アジアにおける日本の対外関係の広がりを学習した。その過程で江戸時代の流通である北前船や越中の売薬商人、また薩摩藩の政策など学習問題を解決するためにさまざまなことを学習することができた。しかし、これは小学生には難しすぎるのではないかという意見が出た。報告の仕方もあったと思うが、「沖縄では昆布がとれないのになぜ消費が多いのか」という学習問題を解決するために一つひとつ進めていった結果であり、子どもたちの歴史認識の形成という意味でも昆布という「もの」から江戸時代を見たことで、これまでの有名な人物を覚えるという歴史の学び方から、素材に自分が入り込み、自分の日常生活を見直しながら江戸時代について考えることができたと考える。

授業方法の観点から討議された結果からも、素材から出た、子どもたちの素直な疑問を生かして学習を進めることで多くの成果、課題を得ることができたと考える。今回の実践を通して、やはり

素材との出会い、素材の選択が学習の根幹をなすことを強く感じている。

「特設・日韓歴史教育交流」分科会

石上徳千代（日本史部会）

（1）石上徳千代報告「『戦歿者慰霊之碑』調べから始めるアジア・太平洋戦争の学習」（地域の「戦歿者慰霊之碑」にある戦没者氏名、戦没地、戦没年月日から「変だなあ」探しを行い、その疑問について考えていく小学校の実践）
（2）ソク・ピョンベ（石秉培）報告「小学生の韓日の歴史認識―文化交流史的観点から見た韓日関係を中心に―」（日韓の交流史における友好的な歴史を知ることで、お互いに共存・共生する未来を考えること目的にした小学校の実践）
（3）中條克俊報告「金子文子『わたしはわたし自身を生きる』―文子は私たちに何を伝えたかったのか―」（関東大震災当時の朝鮮人差別の不当性を訴えた金子文子の足跡を紹介し、その生き方にふれ、共感していく中学校の実践）
（4）イ・ソンフン（李成勳）報告「戦場へ追い立てられた韓国と日本の民衆―皇民化政策と太平洋戦争の犠牲者―」（日韓の民衆がともに被害を受けた姿を示すことで平和と反戦のために連帯できると考え、「もし当時に生きていたなら」という物語を様々な立場で考えさせる中学校の実践）

（1）の報告について「責任論は追究しないのか」「東南アジアでの侵略をおさえるべきではないか」など、小学生の関心や思考とは別に教えるべきことがあるのではないか、という意見があった。また、（3）の報告で授業での意見対立について質問された中條さんは、「文子の主張は当然のことで、意見対立はない」とし、「もし、自分が当時の文子の立場ならどうするかを考えるときに初めて意見が分かれる」と回答していた。しかし、その意見が分かれたようすの詳細は報告されておらず、重視されていない。報告では、「知る」ことを重視していた。

分科会参加者は、日韓問わず、（1）よりも（3）に共感した人が多いと感じた。日韓の友好、平和の構築などのためには子どもの関心にそって「考える」ことよりも侵略や支配の事実を網羅的に「知る」ことが決定的に大切だとする意識が根強い、と討議を通して感じた。本当にそうなのかを討議で深めたかった。

また、（2）と（4）の報告を通して、韓国の実践に今後の日韓友好への強い願いを感じた。そのためにも、よりよい授業についてさらに実践交流が深まればよいと感じた。

□地域に学ぶ集い感想
「戦跡と文化財を活かすまちづくり」

池田恵美子（安房支部）

講師の福留強氏（聖徳大学名誉教授）は〝生涯学習まちづくりの父〟として東奔西走の毎日である。その経歴は公立中学校教師を皮切りに、国立社会教育研修所や文部省生涯学習局を歴任、千葉県生涯学習審議会会長、全国生涯学習市町村会議世話人として、1000を超す自治体に寄与してきた。

従来「街づくり」とは行政の都市計画をさすハード面の呼称であったが、近年は平仮名の「まちづくり」を使い分け、人びとのくらしが活気に満ちた地域社会を目ざすソフト面の取り組みを意味するようになっている。さらに福留氏が提唱した「生涯学習まちづくり」は、学びによって自己実現を図るばかりでなく、住民個々の力がまちづくりに反映され、コミュニティの活性化を図るものとして全国に広がった。さらに全国の事例を学び合うネットワークを呼びかけ、NPO法人全国生涯学習まちづくり協会を設立した。福留氏は高齢社会で主役となる中高年を「創年」と呼び、生涯現役で自分の力を地域社会に発揮する生き方を提案している。

一方、授業づくりからまちづくり活動に広がった安房支部の取り組みは、戦跡や文化財の保存運動で史跡化を実現し、NPO法人安房文化遺産フォーラム（愛沢伸雄代表）を設立。創年が活躍する平和学習ガイドなどの教育支援事業をはじめ、ハングル「四面石塔」や渡米したアワビ漁移民史などの地域素材を活かした国際交流を実践してきた。

現在、安房支部では少子高齢過疎が進む、いわゆる「限界集落」の地域活性化に取り組んでいる。当該地区はかつて日本屈指の漁港を有し、青木繁が《海の幸》を描いた地で知られるが、近年は鄙びた漁村となり、小学校は今春統合され休校となった。コミュニティの役員とともに「青木繁《海の幸》誕生の家と記念碑を保存する会」を結成し、全国の美術関係者らと連携を図りながら活動を展開する経緯において、文化庁の「地域の文化財を活かした観光振興と地域活性化事業」に選定されている。最近、青木繁が逗留した小谷家住宅から明治期の水産資料が大量に発見された。漁村の創年とともに鋭意調査中であるが、国策であった近代水産業における当該地区の重要な役割が解明されていくかもしれない。

安房支部のめざすまちづくりは愛沢理念と福留理念が融合し、文化財を活かした「地域まるごと博物館」構想を横糸に、生涯学習の人材を養成する「創年市民大学」構想を縦糸に、雇用の機会創出を視野に入れた挑戦が続いている。

「将門と古代房総とのかかわりをさぐる」

本田貴弘（日本史部会）

川尻秋生さんによる講演は、「将門と古代房総とのかかわりをさぐる」でした。岩波新書などの執筆があり、脚光を浴びている川尻さんだけに一つの部屋に収まるかなどの心配もありましたが、何とかぎりぎり部屋に収まり、多くの参加者を集め盛況に終わることができました。

私は川尻さんとは初対面でしたが、気さくで何でもこちらの質問にも答えていただき好印象をいだいていたので、講演は私も楽しみにしていました。講演内容は、持論としている武士の発生を、平将門を鎮圧した勢力によって誕生したという経緯を、詳細な史料に基づいて丁寧に解説していただく、わかりやすい内容の講演だったと思います。

ただ事前のやりとりで、講演のタイムテーブルを1時間半の講演、質問時間30分とお話をしていたのですが、実際には1時間で、講演・質疑を終えるという気持ちで臨まれ、講演は1時間でした。でも逆にそれが幸いしたのか、質問の時間が途切れず、1時間近く質疑の時間を取ることができました。川尻さんも個々の質問に対して丁寧にお答えになり、質問者も満足していたように思われました。

事後アンケートなどでも、講演時間の短さを指摘する内容もなく、むしろ質疑応答の時間がたくさんとれて有意義であったという内容が多くあったのでので、運営担当者の私としてはほっとしたところでした。ただ川尻さんには、もっとゆっくり丁寧にお話したかったところを急がしてしまって申し訳なく思っているしだいです。

「戦争の記憶と現代展示」

渡辺哲郎（日本史部会）

講演者の安田常雄氏は歴博の現代展示の中心メンバーとして尽力された方であり、その方から現代展示のねらいをうかがえる、貴重な講演であった。歴博の現代展示はそのスタートから大きく注目されてきた。というのも、国立の博物館が常設で現代史を展示するということ自体が画期的であるからだ。

ここでは講演に即してレポートしたい。現代展示のねらいは、戦争も「現代史」の一環として位置づけ、「戦後」という言葉一つ取っても、そこには戦争が含意されており、戦後の中の戦争にも留意したいとのことであった。展示の部屋は二つに分かれ、一つは満州事変から終戦まで、二つは1970年代までを扱っ

ている。ただし満州事変からといっても、近代展示の部屋に日清・日露戦争が扱われていないため、現代展示にもってきているそうだ。

そもそも歴博の展示は全館共通にいわゆる有名人がほとんど出てこない。現代展示の場合も例外ではなく、佐倉連隊を中心的に扱い、兵士と地域社会の関係を意識した展示となっている。佐倉連隊は南京に行っていないため、佐倉連隊だけを扱うと南京事件が出てこない。そこで「従軍兵士ノ心得」という小さな冊子を展示している。この冊子は1938年8月に第1号が、11月に第2号が出されている。この中には、戦地においては「支那民衆ヲ愛憐セヨ」「第三国人ニ対シテハ正々堂々タルト共ニ其ノ名誉財産等を尊重セヨ」という心得が書かれており、時期から鑑みると、南京事件とのかかわりが見えてくる資料だとおっしゃっていた。

一つ目の展示室の最後には沖縄戦の展示がある。沖縄の歴史をベースに沖縄戦の特徴をクリアに描きたいとの思いがあるそうだ。ただ、軍の関与をどこまで描くかは非常に難しい問題だそうで、展示開始後すぐに修正のための委員会を立ち上げざるをえなかったこともおっしゃっていた。

二つ目の展示室の戦後については五つのテーマ、すなわち、喪失と転向・冷戦・民主主義・中流階級化・忘却という切り口で展示をしている。とくに、喪失と転向・忘却という二つのテーマが独特で、前者は敗戦前後の特徴であり、後者は戦後における戦争という問題を意図している。

講演後の質疑については、戦争について、報告の内容とは直接的なかかわりの薄いものが続いたので、ここでは割愛したい。ただ、そういった質疑を聞くと、戦争展示の難しさを強く感じる。もしかしたら展示室ごとに内容を分けてご講演いただいたほうがよかったのかもしれない。

「太平洋を渡ったあわびダイバーたち」

周藤新太郎（世界部会）

NPO法人安房文化遺産フォーラム研究員山口正明氏に「太平洋を渡ったあわびダイバーたち―115年前、地域が世界と連動して動いていた！」の講演をお願いした。

南房総の若き水産業の専門家、小谷仲治郎が太平洋を越え、あわび事業のためモントレーに旅立ったのは、1897年のことである。南房総と同じ緯度にあるモントレーの地には大量のあわびが生息していた。

彼とその兄源之助は、モントレーの冷たい海水に対応するため、器械式潜水服を用いたが、これが北アメリカでの潜水器漁業の発祥となった。1902年に缶詰会社を設立したが、日露戦争での日本の勝利にアメリカで反日感情が高まり、1915年にカリフォルニア州外にすべてのあわび製品を持ち出すことが禁じられてしまった。だがドイツ系移民ポップ・アーネストが、アワビステーキを開発したことで、あわび料理がカリフォルニアに定着し、事業を継続することができた。

1908年の日米紳士協約前に日本に帰国した仲治郎は、日本からダイバーを送って事業の支援を続けた。今度は1924年に日本人移民が完全に禁止されたが、小谷らの努力により、アメリカ政府は一時的な滞在を条件に、少人数のダイバーたちの入国を許可した。

アメリカでは仲治郎より、兄源之助が日米を結ぶ水産のパイオニアとされて評価が高いが、この認識の違いについて山口正明氏は、源之助が存在しない慶応大学海洋学部卒で、水産生物学の専門家と紹介されてしまったことが原因だと指摘している。

さらに山口氏の地道な研究により、小谷ファミリーには1930年代を中心に多くの日本人が訪問していたことが明らかになった。尾崎行雄、竹久夢二、朝香宮夫妻や高松宮夫妻などの皇族、松岡洋右、海軍軍人瓜生外吉、千倉出身の早川雪洲、新渡戸稲造、さらに救世軍の小林政助、山室軍平や社会主義者の宮城与徳らも来ていた。当時、日本にいたら、普通はまず会えない人たちばかりである。いかに、地域が世界と連動して動いていたかの実証になるだろう。

1942年、小谷ファミリーはアリゾナのポストン強制収容所へ送られたことで、一家が所持していたダイバーに関する記録、資料はほとんど破棄された。しかし南房総には500枚にも及ぶ写真や、ダイバーに関する記録が残っている。

講演後の質疑では、アメリカでの日系人の強制収容所に関連することや、明治期に和歌山県からオーストラリアへ潜水夫として出稼ぎに行った話などにも及んだ。このように南房総から環太平洋地域への歴史的な広がりをイメージさせる講演となった。

山口氏は、この「地域に学ぶ集い」でさらにアメリカとの交流をはかり地域の発展に貢献したいとの思いを新たにされた。

「辛亥革命と千葉の中国人留学生たち」

山嵜早苗（千葉支部）

辛亥革命から101年目の千葉大会で、千葉大医学部の亥鼻キャンパスに建つ辛亥革命の記念碑にまつわる近代日中の「知られざる交流史」を知らせることができたのは、重要なことであった。千葉大の見城悌治さんの論文を読み、清国からの留学生たちが革命軍の新しい祖国建設に心を揺さぶられながらも国費留学生という自分たちの立場に思い悩み、討論を重ねた末、赤十字軍として両方に分け隔てなく参加する道を選んだという事実に驚いた。しかし、もっと驚いたことは、日本の人々が留学生の行動を応援したこと、しかも革命後、ほとんどの留学生が日本に戻り、しっかりと卒業して祖国に帰ったこと。そして、各地で医科大学の創設にかかわり、中華民国の西洋医学を発展させたことである。しかも千葉医専の卒業生の多くがその中心的な役割を果たしていた。石碑は、留学生たちが千葉医専の教師や学友たちの支援に感謝して建てたものだった。

見城さんも千葉に来てこの事実を知り、千葉医専の卒業生一人ひとりの行方を訪ね、辛亥革命時の留学生たちが祖国のどこでどのように医学の発展に貢献したのか、丁寧に調べてまとめた膨大な研究である。その思いが熱い講演となって伝わった。参加者からも単なる美談として受け止めるのではなく、歴史的な背景からその意味を考えるさまざまな質問や意見が出された。留学生たちは、博愛主義とはいっても現実的には革命主義なのだから、官軍の手当てを本当にやったのだろうか。千葉大の校長や教員たちは、真の援助をどこまでしたのだろうか。それは、宮崎滔天のような見返りなしの援助だったのだろうか。国益がらみの下心がなかったのか。当時の中国人留学生たちに対しての差別や不利益があったのではないか、など。

千葉支部では、参加者を募るために400枚のビラを作成し、宣伝活動をした。当日は、世界史部会をはじめ、分科会などでの宣伝が功を奏し、多くの参加者があった。写真資料などもあり、留学生一人ひとりが身近に感じられるようだった。千葉市に残る日中交流の歴史的な史跡や住居などに触れると参加者が興味を示していたので、併せて紹介できるとよかった。

尖閣諸島をめぐる動きが連日報道されているが、100年前の千葉における日中交流の歴史をより詳しく知ることにより、これからの日中関係をどう築いていったらよいのか考える一助としたい。

「『ああダンプ街道』、その後」

栗原克榮（君津支部）

君津地域では1980年代より、高校教員を中心として地域の住民と父母とともに、産廃問題など環境問題への取り組みが続けられてきました。今回の地域に学ぶ集いでは、その取り組みの歴史と、現状の報告を行う予定でした。しかし、当初予定していた講師がやむをえない事情で出席ができなくなり、急遽、『ああダンプ街道』の著者の佐久間充さん（元女子栄養大学教授）に、講師をお願いすることとなりました。

急な講師の変更で、宣伝不足により参加者が確保できないのではといった不安もありましたが、当日は30名を越える参加者があり、担当支部としては安堵しています。

佐久間さんの報告は、次のようなものでした。

房総半島南部では12億トンの山砂が採取され、ビルの建設や東京湾の埋め立てに使用されてきた。そのおかげで首都圏には約3000もの高層ビルが林立し、三つの製鉄所や京浜・京葉工業地帯、羽田飛行場やニュータウンなどが次々と出現した。千葉の山砂は、日本の経済発展の基幹資材として半世紀にわたって採取され、ダンプカーや船で消費地に輸送された。その採取量は一辺が100メートルの立方体で約600個分にあたる。一方、生活道路には激しい「ダンプ公害」が長年続いた。地元出身の佐久間先生は住民からの要請で、住民調査、環境測定、住民塵肺検診を実施し、それらを『ああダンプ街道』にまとめた。ところが1990年代になると、従来の「上り」とは逆に、「下り」の経路で残土や産廃が搬入され、採取跡地などに巨大な「平成新山」が出現し、地下水や用水の汚染が問題化した。つまり「山が消え」て、そのお返しに廃棄物による山がいたる所にできた。

佐久間さんは、華やかな経済成長や都市社会のウラ側に生起している不可逆的な負の遺産に驚愕し、『ああダンプ街道』の続篇として『山が消えた』を報告しています。今回の地域に学ぶ集いでは、『ああダンプ街道』と『山が消えた』の内容を、上空から撮影したものも含め豊富な画像で説明していただきました。参加者は、山砂採取と産廃により破壊が進められた上総丘陵のスライド映像を、食い入るように見入っていました。

会場を使用していた分科会が長引き、おまけにパソコンの設置・プロジェクターの接続などに手間取ったこともあり、開始時間が遅れました。そのことがあとまで響き、30分間予定していた質疑が15分ほどしか取れませんでした。

「韓国の教師と日本の高校生がともに学ぶ『在日』問題」（公開授業）

平野　昇（千葉支部）

歴教協日韓交流委員会が企画している「日韓歴史教育交流」の集いでは、毎年、韓国の全国歴史教師の会との交流活動を紹介してきた。今回は、韓国の教師が日本にいる高校生に授業を行い、それを参観してもらい意見交換をするという公開授業を実施した。参加者は例年を上回る60名以上で、エアコンが効かずみな汗だくになりながら参観した。

授業者はソウル良材（ヤンジェ）高校の朴中鉉（パク・チュンヒョン）さんで、授業のテーマは「敗戦、そして朝鮮半島の分断。在日コリアン」だった。授業を受けた高校生は、千葉県内の公立高校、都内の私立高校、朝鮮中高級学校の生徒たち16名だった。高校生の募集にあたっては、千葉県歴教協・東京歴教協に協力をいただき、高校生に今回の企画の内容を説明したうえで参加してもらった。

授業は朴さんの流暢な日本語で進められた。彼は、映像を織り込みながら静かに語り始めた。まず、今では高校教科書にも記述されている関東大震災時の朝鮮人虐殺についてより詳しく説明した。そして、荒川、四ツ木橋での習志野騎兵隊による朝鮮人虐殺を具体的に語った。彼の話はここで終わらず、1982年から始まったこの地での朝鮮人の遺骨を発掘して追悼することをめざした日本人たちの活動を紹介した。発掘はさまざまな圧力で成功しなかったし、運動に参加した一人の日本人は私費でもいいから石碑を建てたいといっているのに区役所が拒否しているという現実を語った。そして、ある日本人学生の意見「日本政府は簡単な手続きで帰化を受け入れているのに、なぜ不満ばかりをいうのか」をとりあげ、生徒たちに意見を求めた。朴さんは、まず朝鮮学校の男子生徒を指名し、「あなたの国籍はなんですか」と問うた。彼の返事「朝鮮籍です」を受けて、「なぜ、あなたは朝鮮籍を変えようとしないのですか」とさらに問いかけた。男子生徒の答えは明快だった。「ルーツとしての朝鮮籍に誇りを持っているからです」というものだった。彼の発言を他の参加者はどう思うかと、朴さんは生徒たちに問いかけ、討議は進められた。

授業後の討議で、参加した日本人の生徒たちは、口々に、今まで在日の人と接したことはなかったが、彼ら彼女らが自分の生き方を真剣に考えていることを知り、よい経験になったと語っていた。参加してくれた生徒たちが自分の考えを率直に語り合うよい体験になった授業だった。

「近藤一さんに聞く―中国戦線・沖縄戦の実相」

渡辺　明（習八支部）

近藤さんは1940年に入隊、41年に山西省、河北省を転戦し、44年8月沖縄へ渡る。

はじめに、高校生が製作したビデオの上映があり、近藤さんの沖縄戦の体験がインタビューを交え放映された。真摯に高校生に向き合い、悲惨な沖縄戦を語る近藤さんからは、若い人々に戦争の真実を知ってもらいたいという強い願いが伝わってきた。

「体験はウソ、偽りなく聞いていただきます。そんなこと……と思うかも知れないが、ウソは言わない、真っ正直に受け止めてください」と話し始めた。

「つけ！という上官の命令で捕虜の中国人をさした。人間の体は柔らかいものだと思った」「行軍の時、30歳の主婦を輪姦し、裸にしたまま、連れて歩いた」「日本軍は赤ん坊を殺し、妊婦の腹を切り裂いた」など、多くの住民虐殺の話をした。

近藤さんの所属する軍は、無抵抗の村々を襲い、略奪、強姦、輪姦、殺人を続けながら行軍した。「50回謝っても、100回謝っても謝りきれない」と声を詰まらせ、涙を拭いながら話した。

中国での虐殺のようすを活字で読む事はできる。しかし、名前を名乗り、「自分はこんなことをやった」という体験を、目の前で聞くことは初めてだった。小柄で、穏やかでやさしい笑顔を見せる近藤さんを殺人者に変えてしまう戦争の醜さ、恐ろしさを思い知らされた。

沖縄戦では「米軍の攻撃で動けなくなり、乗っていた担架を放り投げられ、一人で空を眺めていた。なかまの兵士は火炎放射器でやられ、不動明王みたいになって燃えていった。200名の中隊は、生存者11名、そのうち将校は9名、兵士は2名だけだった」。

誰がこんな戦争を引き起こし、人々を戦場にむかわせたのか。兵士を苦しませたのか。近藤さんは、話の中で、将校たちが、遊郭の女性を連れて歩いたり、部下に蛮行を命じたりしていた事を強い憤りを込めて語った。また、戦争を命じ、多くの住民や兵士を苦しめた天皇、大本営に対しても強く批判した。

戦争に敗れ、憲法九条を知り、中国での蛮行を思い出し、「もう、二度と戦わない」と決意したという。平和憲法を変えようとし、自衛隊が海外にまで出て行くようになった現状に強い憤りを持ち、「もっと中国での蛮行や沖縄での惨状を知るべきだ。あと何年話せるかわからないが、自分の体験を5分でも10分でも話し続けたい」と語った。

「震災被災地東北からの報告」

前田徳弘（東葛支部）

震災後1年5か月を経て、被災地は一体どうなっているのだろう。この関心は今も高く、昨年には及ばないものの、会場を覆い尽くす参加者が集まりました。

まず東北被災三県からの報告。①宮城の佐藤昭彦さんから、沿岸部における学校統廃合問題、産業復興の状況や住民の高台移転問題について、②岩手の森本晋也さんから釜石の防災教育の実際について、③福島の藤田真さんから放射能で混乱する教育現場と教育行政の対応についての報告を聞きました。

佐藤さんは、気仙沼では漁業など産業の復興が進まずまだ失業者が多いこと、防災集団移転も遅々として進まず、地価の下落が止まらない中で大手ゼネコンが土地を手にいれて開発を進めるという情報が流れていることを挙げたうえで、失業保険が最終的に切れる9月以降事態はさらに

悪化する可能性がある事を強調していました。震災の復興の進度には仙台・石巻などの都市部と気仙沼など地方との間に、かなりの地域格差があるようです。

どの報告も重くきつい問題がとり上げられていましたが、聞いている印象では岩手より宮城が、宮城より福島がきついような気がしました。「言葉をなくしました。いったい今まで何を見てきたのだろう、と。決して他人事ではないと考えていた分、自己のせまいものの見方に反省するしかなかった」という岡山県の女性の感想も速報『くろしお』11号に掲載されていましたが、私が一番強烈なショックを受けたのは教育にかかわる部分でした。被災にからんで学校の統廃合が進められており、遠距離通学を強いられる生徒が生まれていること、そんな中で宮城県教委が固執し鼓舞し続けているのが学力向上とそのための授業時間確保だというのです。こんな中で教員がいかに疲弊するか考えてみてください。

女性教員の発言がありました。「福島では避難できる生徒はすでに非難している。避難によって夫婦・親子がバラバラになっている家族も多い。地域も家族も失われている。いま残ってているのは避難できない生徒だ。除染するといっても山や野原をするわけではない。どれだけの内部被曝があるかわからない。そんな中で大丈夫という行政の判断のもと、私は生徒をプールにも入れている」。切なくて言葉がありませんでした。

□現地見学感想

「久留島浩先生と語る歴博近世展示」

加藤恭子（千葉支部）

思い返せば、現地見学の準備は昨年から始まっており、私が担当者としてA・Bコースの企画に参加したのも昨年の年末からでした。私は全国大会に参加するのも初めてでしたし、正直現地見学と聞いても実感がわかず、当初、もう一人の担当者平野先生の提案をこなしていくだけで精一杯でした。ただ、馴染みのある歴博についての企画でしたので、プレコース案やチラシ作成などは、楽しんで準備できました。

6・7月になり、申し込みが始まり現地見学の参加者人数が手元に届くようになると、担当者として気持ちが高揚してきました。どうすれば成功するかということを、平野先生と打ち合わせしながら考えました。

さて、8月3日現地見学当日。遅刻者対応等少し混乱はあったものの、学生ボランティア3人と平野先生・浅尾先生と私、計6名のチームワークで受付は円滑に進みました。

私はAコース「久留島浩先生と語る歴博近世展示」を担当しました。久留島先生の軽妙な語り口のもと、笑いも交えながら、第3展示室の解説がされていきます。江戸図屏風のタッチパネルを使いながらの解説では、参加者全員身を前に乗りだして聞き入り、熱気あふれるものでした。描かれたものの意味を考えながらの詳細な鑑賞は、屏風の中に入り込んだ感覚すら覚えました。また松前・長崎・対馬・薩摩4つの口についても、鎖国の概念を覆す国際交流を裏付ける資料の数々に参加者は深くうなずきながら見学していました。久留島先生の熱情あふれる解説や新鮮な切り口に、それぞれ得られるものの多い2時間となったと思います。個人的な感想としては、解説のメインとなった第3展示室1室目は、近世に生きていた人々の息遣いを身近に感じることができ、その世界に入り込めてしまう空間だったと感じています。この感覚を持ち帰り、学校での授業に生かしたいと思いました。お忙しい中、解説してくださった久留島先生にも感謝でいっぱいです。

解説も終わり、参加者全員でバス・電車で移動です。この移動では乗り換えがあるので多少不安でしたが、時間通りに習志野文化ホール前に到着し、解散となりました。

振り返ると、平野先生・浅尾先生、学生ボランティア3人のおかげで、無事に終えることができました。また、担当者として本当に貴重な経験ができました。ありがとうございました。

「安田常雄さんと語る新しい歴博現代展示」

平野　昇（千葉支部）

このコースは、歴博の現代展示（第6展示室）をつくった研究者の案内で見学する企画だった。30名定員で募集したところ、全国各地から26名の参加者があった。

安田さんは、まず入り口で、全国でも数少ない現代展示を歴博がつくった意義について話された。強調されていたのは、歴博は国定の歴史観を通史的に展示する場所ではなく、歴博の研究者と他機関の研究者との共同研究の成果をテーマを設定して展示するものであるということだった。つづいて「Ⅰ.戦争と平和」部分の見学に入った。ここで目立つのは、現在歴博のある場所に置かれていた佐倉連隊の展示である。ここでは、佐倉連隊という個別の連隊を取り上げて、その誕生から終わりまでを展示している。参加者の質問に答えて、安田さんは個別の連隊の展示では見えてこないもの、限界がある、それは彼らが戦ったいろいろな場所で彼らに接することになった住民たちの声であると語った。総体として被害者側の民衆の状況が見えてこないというのである。地域の中で兵士はどのようにつくられていくのかは示せたが、それでは不十分な面があると述べられたのが印象的だった。

ご承知のように「銃後の生活」の沖縄戦の展示は、さまざまな団体から批判を受けている。この展示を説明される安田さんもそのことを意識されていたと思うが、彼が強調されていたのは、沖縄戦以前から沖縄がどのような状況に置かれていたのかということから沖縄戦の最終局面を考えて展示しているということだった。そのような意味で、「方言札」が示されているというのである。率直なところ、歴教協会員からこの展示に関して批判的な質問が出るのではないかと予想していたのだが、批判的な意見は全くなかった。歴史研究の成果を展示しているという意味が理解いただけたのではないかと感じた。

「Ⅱ.戦後の生活革命」は、「高度成長と生活の変化」と「大衆文化から見た戦後日本のイメージ」のコーナーで構成されている。限られたスペースの中で、戦後をどう展示していくかという苦労を具体的に語られた。参加者の「現代展示をしていて、外からの圧力とか社会的な制約とかで展示が難しかったことはなかったか」という質問に、「ひとつは天皇。もう一つは、水俣展示には相当圧力があった」と答えられた。

約2時間半、休憩もなしで立ったままの展示解説だったが、参加者のみなさんも熱心にメモを取ったり質問をされたりして、意義のある見学会になったと感じている。

「宮原武夫さんと歩く江戸時代の新田村」

遠藤茂（船橋支部）

歴教協の全国大会が千葉で行われ、8月3日に現地見学を行った。全体会前の半日、およそ4時間を使った史跡巡りであったため、多くの内容を盛り込むことはできなかった。実際は暑さなどもあり、4時間を目一杯使うことはできなかった。題名にあるように、船橋市前原周辺の地境を巡る幕府の裁定結果の絵図と、地蔵の背中に彫られた前原新田成立のいきさつ、現代に残る小字名の三つの記録をもとに、江戸時代の新田村のようすを再現しようという試みであった。

参加人数は要員を除くと39名で、千葉7名、東京7名、宮城・埼玉・神奈川・愛知が各3名、静岡・長野・大阪・岐阜が各2名、福島・青森・三重・兵庫・長崎が各1名であった。全国大会にふさわしく各地から参加してくれたことが分かり、実施する側としても大変うれしい結果であった。

船橋市には江戸時代に開発された新田村が七つある。船橋の新田は田んぼではなく畑である。新田開発はわかっているようで記録のないものが多く、詳しい内容はほとんどわからないのが実情である。その中で前原新田は、「道入庵」にある延命地蔵の背中に開発の由来が刻まれており、珍しく経緯がわかっている新田である。由来によれば、1673年に摂津国（兵庫県）出身の天野四郎兵衛と上東野（かとうの）新助によって224町歩、およそ224ヘクタールの開発が行われ、30町を馬草場として久々田、谷津、五日市村に譲ったと刻まれている。成田街道に面して短冊形に開発された新田は現在の地図を見ても、当時とほとんど同じ区割りになっている。また、前原に隣接す

る中野木、飯山満、七林の小字を調べると、4分の1が元禄時代からの名称が使われている。このことから江戸時代と現代を比べることが可能なのである。

もう一つ江戸時代の絵図があり、現代と比べることにより当時のようすをうかがうことができる。この絵図は「元禄6年地境論裁断絵図」といわれ、前原新田・滝台新田と、古い村であった飯山満村との地境騒動が起こったとき、幕府が裁定を下し証拠として残した絵図である。この絵図に書き込まれた道路と川および小字名を、現在の地図と比べると当時のようすが想像できるのである。この絵図や小字名から場所がわかったり、地域の地理的な状況がわかるが、民衆の生活やようすはつかめない。庚申塔や馬頭観音あるいは神社に置かれた十九夜塔、二十三夜塔、出羽三山講碑など庶民生活を物語る石碑などを重ね合わせたときに、当時の民衆の生活が生き生きと想像できるのである。

参加者の反応はよかったと感じた。見学しているときの参加者のようすや質問の多さなどからうかがうことができたし、一部ではあるが見学後の感想を何枚か読む機会があり、それらを総合すると興味・関心に合致した見学会であったと感じることができた。

「騎兵連隊と毒ガス学校」

川鍋光弘（世界部会）

参加者の感想やアンケート回答が、速報に載った「負の遺産として習志野学校跡地の保存を」という一編しか掴めないので、ここでは、コースの案内者・説明者が感じた、戦争遺跡の現地見学の難しさや課題を中心に報告してみよう。

習志野は日露戦争直前の騎兵連隊に始まり、戦車連隊から毒ガス学校、そして現在の自衛隊中央即応集団と侵略戦争のための軍隊の根拠地である。しかし、自衛隊を除いては軍隊そのものの実態は残っていない。豪華な大学の学園都市に変わり、毒ガス学校跡など危険な箇所は荒野原になり、いずれも幾つかの記念碑が残っているにすぎない。そして、地元ではドラマ「坂の上の雲」ブームに乗じて、町おこしを計ろうとイベントに懸命である。そこで、習志野学校跡から時代を逆に騎兵連隊跡までのコースを辿り、当時の写真や地図を主に資料をつくって説明すれば、「坂の上に輝く白い雲をめざして」などでは決してなく、暗雲たれ込める暴風雨の中に闇雲に突き進んでいった天皇制帝国主義軍隊の実態が想像できるかと考えたが、30度を超える真夏の暑さではどうだったのだろうか、参加者の感想が気になるところだ。

最初の場所では「みどりの会」が用意してくれた習志野学校残存施設の地図と写真と現物との関係がなかなか掴めないようだったのも無理ないか。毒ガス学校跡は市や「みどりの会」など関係者が草刈りしてくれてあって大変歩きやすかったが、かっての荒涼たる廃墟感は薄れて、「公園などに整備したら」という声が聞かれた。

自然の緑を残すのか、マンション用地に売られてしまうのか、戦争遺跡として残せるのか、大きな課題が残されている。騎兵連隊跡も、大学の施設が拡大され、行くたびに縮小整備されてゆく。将来はどうなるのだろうか。

若い参加者に学徒出陣について質問された。そうか、そうなのだ、軍隊の跡は学校ばかり、若者の思いはそこにつながる。習志野学校も学校であった。僅か3時間程度で帝国陸軍を語るのは無理なのかも。充分な時間をとって、秋山好古賛美の「お休み処」から自衛隊まで見学することが大切かも。

「大逆事件・管野須賀子『針文字書簡』の謎」

白鳥晃司（松戸支部）

8月3日の当日もやはり熱い一日でした。80歳を超えるご高齢の方も参加ということもあり、緊張のなか、全国からの参加者をお迎えしました。最低催行15名をクリアーし、キャンセルが1名ありましたが、28

名定員の中型バスも満席でした。集合時刻に集まれなかった3名の方も、目玉である「針文字書簡」見学に間に合うこともできました。初任が我孫子第一小学校勤務だった、琉球大の加藤さんもこのコースのメンバーのお一人。各地で活躍しておられるベテランが多数参加されていました。我孫子駅から、現在、公園となっている手賀沼畔に面する、柳宗悦・志賀直哉らの白樺派の面々が別荘とし、ジャーナリスト杉村楚人冠が住んだ地域に触れていただこうとするものでした。

当初の計画案では、1日コースを計画しましたが、白樺文学館と杉村楚人冠記念館（楚人冠旧邸）は公的施設で、月曜日開館は叶わず、コース設定自体を諦めなくてはと考えました。県事務局長の楳澤さんや実行委員長の柄澤さんに、半日コースで組んでみたらとのアドバイスをいただきました。記念館での楚人冠宛の管野須賀子からの「針文字書簡」のレプリカを見ること、文学館での民芸の柳宗悦（朝鮮の3・1独立運動や特高に睨まれたことなど）の紙芝居上演に絞りました。率直なところ、短い時間でのフィールドワークでしたが実施してよかったと思います。

昨年の県の秋の見学会を〝予察〟と位置づけて取り組みました。それが今回の案内に反映できたと考えます。支部活動や松戸・東葛地域の退職教員の会などで同じコースを何回も廻ってきました。そのなかで、「大逆事件100年」特別展で初公開された「針文字」や楚人冠と幸徳秋水との親密な関係にあったことを示す書簡類を直に見ることもできました。楚人冠研究でお世話になるなか、レプリカを作成中という〝報〟を耳にし、それが今回の目玉にすることもできました。じっと、そのレプリカに見入る参加者の眼差しに接し嬉しくなりました。また、白樺派に関する紙芝居上演につながりました。献身的に白樺派の業績を市民に知らせようとする方々の取り組みを、ぜひ全国の歴教協の方々に知ってほしいと考えました。こちらが意図することを、それぞれの施設の学芸員や職員の方々が汲んでくださり、的確な案内や解説になったと思います。本当に感謝するしだいです。

日本の近現代史を千葉県の北西部手賀沼畔・我孫子から考えるという目的は達成できたかが大事なところです。広島平和公園内にある原爆死没者慰霊碑を模した、手賀沼公園の「平和都市宣言碑」建設に至る経過なども少しは、触れることもできたかなとも思っています。

全体集会会場となる習志野文化ホールに、5時に到着できるか気になっていましたが、そのバスの中で、手賀沼大橋を渡ったあたりから、説明不足だった楚人冠と漱石・啄木など文学者とのつながり、我孫子・手賀沼の千葉県のどの辺りにあるのかという地理的位置、そして、東葛地方に今も伝わる将門伝説についてなど、コース担当の田中正則さんと話しました。途中、心配したように渋滞に巡り合わせとなりましたが、5時ちょっと過ぎにホールに無事到着。何とか成功裡に（？）役目を終えることができ、ホッとしたというのが実感でした。不十分さも重々わかっております。記念館では、楚人冠が果たしたジャーナリズムについてのことはどうだったのか、そして文学館では、ロダンの彫刻がなぜ、ここにあるのか、竹久夢二の絵と白樺派との関係は何か、小林多喜二と志賀との関係を示す書簡から何が見えてくるのかなど、もっと踏み込むことができなかったかなど、もっと説明があってもよかったのではとも思いました。

私は、この取り組みの中で、自分なりの〝成長〟を実感しています。楚人冠について勉強する中で、幸徳秋水とともに初期社会主義を実践した堺利彦と楚人冠との交流を示すいくつかの書簡類の存在に気がつきました。これを追究（求）していくと、日露戦争から「韓国併合」「大逆事件」までと、「事件」後の「冬の時代」から大正デモクラシー、そして「満州事変」へと繋がる近現代史学習が、地域に根ざした形でできるというという可能性についてです。楚人冠翻訳の「トルストイ日露戦争論」が与謝野晶子の「君死にたまふこと勿れ」の詩に影響を与えたこと、そして関東大震災で最愛の息子を二人も失った楚人冠ですが、そういうときでも朝鮮人虐殺や亀戸事件・甘粕事件についても記事にし、現在ジャーナリズムが失いかけている庶民の立場で報道するという視点を貫き通していたということもわかりました。ヒューマニズム・博愛とはどういうことなのか、白樺派の人たちが求めたものと合わせて、閉塞状況にある世の中のあり方を考えていくことの大切さを学びました。

参加者の感想をいただいていない段階で書きましたが、この現地見学案内と〝地域に学ぶつどい〟のチャンスを与えてくれたことに感謝しています。

「払い下げられた朝鮮人―遺骨の発掘と慰霊の跡を尋ねる」

小薗崇明（専修大学大学院）

2012年8月6日に実施された現地見学Fコースは、案内スタッフを除いて32人が参加した。それぞれの参加地域は、福島、千葉、埼玉、東京、神奈川、長野、山梨、静岡、愛知、大阪、京都、鹿児島となる。

Fコースの行程は以下の通り。①JR船橋駅北口（集合場所）、②天沼公園（バス乗車地）、③海軍東京無線電信所船橋送信所跡（船橋市行田）、④関東大震災犠牲同胞慰霊碑（船橋市馬込霊園、次の移動中車内で映画「払い下げられた朝鮮人」上映、途中自衛隊習志野駐屯地・演習地を確認）、⑤なぎの原（八千代市高津、犠牲者埋葬・発掘地、なぎの原の見学の前に観音寺で昼食、）、⑥観音寺（八千代市高津、関光禪・観音寺住職、吉川清・千葉県における朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会代表の挨拶）、⑦長福寺至心供養塔（八千代市萱田）、⑧バスの車窓から陸軍習志野収容所を確認（渡辺明さん説明）、⑨JR津田沼駅（解散場所）。

アンケートを集計してみると参加者のなかで最も印象に残ったのが、実行委員会の大竹米子さんによる、なぎの原での犠牲者の遺骨発掘作業についての説明だった。もともと加害の地域の人たちから聞き取り調査をして虐殺事件を明らかにし、そして地域の人たちと交渉しながら遺骨の発掘作業を行った大竹さんの話は、リアリティーがあり、緊張感がある。また、映画の評判も良かったが、これも事件の目撃者が映画に登場し話をすることで、虐殺のリアリティーが伝わったからだと思う。

私も参加した専修大学・関東大震災史研究会による『地域に学ぶ関東大震災』（日本経済評論社、2012年）は実行委員会が活動してきたこと（それで明らかになったこと）を継承することが目的であるが、その動機となったのは実行委員会の緊張感のあるフィールドワークだった。今回Fコースの案内スタッフには私を含め同書の執筆者（若者）が二人参加したが、アンケートの感想に「ベテラン、若手の名コンビ」と書かれていたのは素直にうれしかった。本がフィールドワーク中に売れたことも、私たちの目的が幾分か伝わったからだと思う。

とは言え、さすがは大竹先生～!とまだまだ思ってしまうのは、私が自分の案内は下手だなぁと思うことによる。今回のような長いコースに案内として加わるのは初めてで、そのために案内用の資料作成にも携わったが、説明中は作った資料に頼ってしまい、私が学んできた緊張感を伝えることが難しかった。自分の説明が終わった後に、あんなこと、こんなことをもっと喋ればよかったと反省した。このような個人的な課題を克服するためにもこれからも実行委員会の活動に参加していきながら、案内の力をつけたいと思う。

今後の課題として、アンケートには植民地支配の問題にふれていないという意見、全体像を知ってほしいという意見があった。今回は地域の問題を深く掘り下げて説明したが、そのうえで上記の意見に応えられるような案内をする必要があると思う。軍隊―天皇制の問題だけではなく、植民地支配―近代国民国家の問題としての位置づけが必要だろう。

「漁船でまわる三番瀬・歩いてまわる漁師町」

小林光代（船橋）

・参加者33名（会員28名+要員5名）（埼玉、東京、北海道、静岡、茨城、大阪、沖縄など）
・主な見学地①船橋の漁業と三番瀬のようす、②京葉工業地域船橋埠頭（鉄鋼・金属工業団地、京葉食品コンビナート）、③東京ディズニーランド沖や幕張メッセ沖のようす、④漁師町を歩く・・海老川、船橋大神宮（燈明台、六人網元の碑）、飯盛大仏
・ミニ講演　大野一敏さん「東日本大震災と船橋の漁業」
＜成果＞
・東京湾（三番瀬）の現状を多くの人に実際に見てもらえ、漁師の話を聞いて参加者に実感してもらえた

ことが一番の成果と思う。特に初めての参加者は大野さんの説明する「水深1.5m、1.8m」の声に、その浅いことや広いことに驚いていた。長野・群馬など海のない地域からの参加者など、トビウオやボラが飛び跳ねる姿に感嘆の声をあげていた。
・予定よりも遠く浦安沖から江東区沖、幕張メッセ沖まで2時間の案内で、簡易椅子まで用意してもらえ、陸からとは全く違った見え方だと参加者も満足していた。
　アンケートは28名中15名の提出だが、13名が満足したと答えた。理由は「ポイントポイントでわかりやすい説明があったのでよくわかった」「ミニ講演で直接漁師から話を聞けたので気持ちが伝わった」「漁船に乗ったのが良かった」などの声があった。
・昼食時に参加者の交流会をもったが、各地の情報がわかり新たな学びに繋がると好評であった。特に釧路からの参加者が「釧路は面積は船橋の6倍くらいあるが活気や漁獲高は6分の1くらい」との発言にみな驚いていた。
・漁師町を歩いた中で特に船橋大神宮の燈明台が「珍しい」と好評であった。
・漁協職員や船橋大神宮など、現地の人々が好意的に協力してくれた。
＜課題＞
・下見後の資料の準備が間に合わず、部会での検討が不十分であった。
・下見でまだ不十分な点があった（漁協のトイレが男女一緒、漁船のマイクの音量が低い）。
・シケで漁船が出ておらず、見学予定の貝の選別工場や魚の荷挙げ作業は見学ができなかった。活気ある漁港のようすが講師の話とともに理解できたと思うが残念である。
・船橋支部は会員がC、F、Gコースに分散する形となり、資料の準備などかなり厳しかったが、当日の運営など船教組からの参加者に助けられた。

「東京湾岸の古墳」

栗原克榮（君津支部）

　Hコースは、参加者が少なく開催が危ぶまれましたが、お一人の参加希望者の強い要請が、歴教協のメーリングリストにアップされました。その後押しもあり、コースを実現することを前提として、諸経費を切り詰め、赤字覚悟で実施に踏み切りました。結果は、参加者12名により、何とか赤字を出さずにすみました。
　6日8時半、時間通りに全員が集合し、まずは市原市埋蔵文化財センターに向かいました。、稲荷台1号墳、神門5号墳、上総国分寺を見学、案内は市原市埋蔵文化財センターの高橋さんです。どちらかというとマニアックなコースの参加者ですので、次から次へと専門的な質問が寄せられ、高橋さんも丁寧に答えていただきました。おかげで、充分な時間を確保したつもりが時間オーバーとなり、15分遅れで国分寺を出発する時には、もの凄い雨に見舞われました。しかし、豪雨も移動の区間だけで、次の金鈴塚に着く頃には雨も上がり、ほとんど濡れずにすみました。
　金鈴塚の現地では、木更津市郷土博物館「金のすず」学芸員の稲葉さんが、石室前で待っていてくれました。石室前での説明の後、現在は削られてなくなってしまった前方部であったところまで歩いて、実際の金鈴塚の大きさを実感してもらいました。その後、郷土博物館「金の鈴」へ移動、少人数の小型バスであったので、博物館のある山頂までバスで移動できました。「金のすず」は月曜日の休館日でしたが、参加者12名だけのために特別に開館してもらえました。みなさんに好評だった美味しい「アサリご飯」弁当の昼食のあと、館内を見学しました。11月2日から開催予定の「金鈴塚古墳展」のために制作したばかりの、馬の模型も特別に倉庫の中で見せていただきました。まだ、展示室に出ていないものですが、この馬の模型に、金鈴塚古墳から出た馬具をつけて展示見せるという予定だそうです。その馬の復元の元になったのは、大阪の蔀屋北遺跡から発掘された、5世紀の馬の全身骨格です。
　さらに南下して富津市へ、市役所前で富津市教委の小沢さんが合流し、小沢さんの案内で内

裏塚古墳群を見学しました。弁天塚古墳・三条塚古墳・森山塚古墳・九条塚古墳・内裏塚古墳・上野塚古墳では、実際に墳丘内に入り説明を受けました。そのほか、割見塚古墳・亀塚古墳を外から見学しました。最後に、JR青堀駅前の「古墳の里ふれあい館」で解散となりました。

参加をされた会員の皆さんには、十分に満足していただいたことと思います。少人数参加にもかかわらず、膨大な資料や専門家のガイドを準備したことに、参加者よりこもごも感謝の言葉をいただきました。参加者に好評だっただけに、もっとたくさんの参加者があったらよりよかったことと思いました。

「成田空港のすべて―開発・闘争から空の安全まで」

前田徳弘（東葛支部）

東葛支部が成田空港のツアーを引き受けるのは2回目です。今回は空と大地の歴史館が開館し三里塚記念公園の中の防空壕が公開されたのを機会に、下総台地の開墾から成田闘争へと続く地域の変化を正面に据えたフィールドワークにしたいと思いました。メインは、高橋清行さんにバスに乗ってもらい、空港に囲まれた土地で有機農業を続けておられる島村昭治さんのお宅を訪ねることです。成田といえば過激派、そんな闘争があったことさえ忘れ去られようとしている今、成田の意味を島村さんに出会うことを通して参加者に考えてもらいたいと考えたのです。直前に高橋さんが体調を崩されるというアクシデントがありましたが、島村さん宅では合流してもらい、島村さんから空港との関係、有機農業にかける思いなどを直接お聞きすることができました。アンケートを見ると、答えていただいた17人のすべてが、印象に残った見学地として島村農園をあげていました。その一人は島村さんは「穏やかで強い意志の北房総の大地のような人」と書いています。

2日目午前中は、この島村農園の前後に三里塚記念公園と「空と大地の歴史館」を尋ねました。バスの中ではにわか勉強の私たちが解説をすることになりましたが、「それぞれ詳しい方がリレーで案内」「細かすぎず、おおざっぱ過ぎずわかりやすい話」など、まずまずの評価をいただきました。突然襲来した大雨も、博物館に入った直後に降り始めるという幸運に恵まれ、予定通りの行動をつつがなくこなすことができました。

これに加えて、1日目夜に空の安全についての講演会、2日目の午後に税関見学と、成田空港の機能と現実についての学習を行いました。航空労組連副議長中川清さんの話は、空の安全について日頃聞くことのできない話の連続で、私たちにも新鮮な話でした。参加者からは「多面的に成田が見られた」という感想もあり、「成田空港のすべて」というコース設定の意図がある程度実現できたと考えています。

大変だったのは参加者が増えなかった事です。最終的には21人と最少催行人数を超えましたが、一般参加者の中に6人もの東葛支部会員が加わっていました。その分行き届いた対応ができたと思います。旅館・食事もおおむね好評でした。

「佐原の町並みと香取神宮」

及川敏男（香取支部）

8月5日（日）は移動のみで、翌6日（月）講師含め19名で現地見学をスタートした。「佐原の町並み」を講師の酒井右二さんに案内してもらう。清宮家前から伊能忠敬記念館（休館中）へ出て佐原村の概要を聞く。近世佐原の繁栄には江戸とともに関東各地や近江など遠隔の町とも直接交流を通じ全国的なネットワーグが存在していた。そのもとで多くの文化人を輩出している。国学者梶取魚彦の旧宅跡を確認し樋橋を渡る。伊能忠敬旧宅は復旧工事で敷地の一部しか立ち入れなかった。

三菱館（旧川崎銀行、1914年建築レンガ造り）で旧町並みの古い写真や展示作品、佐原祭礼のようすなど見学する。町の中心大橋（今は忠敬橋という）から小野川沿いや街道沿いの町並み

を歩く。正上の土蔵造りと土産店内、正文堂（1880年建築）はじめ多くが復旧工事中で残念ではあったが、作業途中の土蔵の構造などが垣間見ることもできた。水分補給の後、東薫酒造の見学に入る。店の案内で約30分、試飲などをして観福寺へ向かう。

住職から寺の説明と保存館にある懸け仏を見学。香取神宮本殿に懸けられていたものが排出され観福寺に保存され残ったものである。4体のうち2体（十一面観音像、釈迦如来像）には光背に「弘安五年」の銘があり、モンゴル襲来の際戦勝祈願として造仏されたことがわかる。他にも市内荘厳寺の十一面観音や藤沢市の梵鐘など多くの仏教文化財が流出し、廃仏毀釈の激しさがうかがわれた。さらに伊能忠敬の墓所を見学した。

昼食は道の駅・水の駅「水の郷さわら」で各自の自由食、早めに終わり併設の防災センターの展示（利根川の変遷や忠敬の測量地図）を見た人もいた。

1時出発。香取神宮へ向かう。楼門の下で講師の平野功さんから説明を受ける。拝殿・弊殿は屋根のふき替え工事中でネット越しに檜皮葺きのようすがよく眺められた。本殿を回りながら雨の中で資料をもとに建築の構造などについて詳しい説明があった。宝物館では国宝海獣葡萄鏡などを見学。神徳館の勅使門を見ながら神官についての説明を聞く。雨も上がり祖霊杜（神宮寺跡）を見学し、手水鉢の文字にかすかに残った神仏習合の痕跡を確認し、急な坂道を下り駐車劇こ出た。

ここで講師らに別れ、東関東道路を経て京成成田駅まで参加者を送り15：30解散し、現地見学を無事終了した。

「房総半島の先端から東アジア交流史をみる」＆「東京湾要塞と本土決戦陣地をあるく」

愛沢伸雄（安房支部）

K・Lコースとも申込者数が少なく、当初の安房支部企画の2コースは合体することとし、最小催行人数を15名とした。最終的に申込者は19名となり実施可能になった。参加者は東京4名や岡山3名、愛知2名のほか、北は北海道から南は九州の熊本までの19名（男16名、女3名）で、年代は60～70代10名の教員退職者が中心であった。合体コースは2コースの特徴的な場所を網羅して、安房支部で20余年にわたって掘りおこし地域教材化したもの、また文化財保存運動から史跡化した戦跡や文化遺産にしたもの、さらにはNPO活動による地域づくりを紹介するとした

現地見学2日間のガイドは、主に安房支部（NPO安房文化遺産フォーラム）代表の愛沢伸雄が担当し、2日目の青木繁ゆかりの漁村でのガイドは小谷家当主など他のNPOメンバーが行った。炎天下での見学実施にともなって病気や事故を防止するとともに、緊急車両がバスに随行した。また、9名の要員は、交通安全やバスの駐車誘導、あるいは体調サポートや見学地・食事場所との連絡などスムースに運ぶよう準備をした。

参加者の主な感想を抜粋すると「ヤクザっぽい男の『私有地を通るな』という嫌がらせの現場に出会い、……このようなきびしい中で頑張って一つひとつ築きあげてきたことが実感できました。このような臨場感ある現地見学は初めてでした」「1日目、戦跡中心。2日目、地域の文化、世界とのつながりなど、古代から現代にいたるまでのエッセンスがすべて入っていて大変完成されたものでした。あえて言うなら、どうしてこのような現地見学の参加者が少なかったのか、とてももったいない」「自らの体験をふんだんに交えてガイドはとてもよかった。また、スタッフの方々の支援もしっかりしていた」「体調が良くなくて、車など本当にお世話になり、ただただ感謝」「内容が豊富でいろいろな現地を紹介され、企画された方のご苦労がしのばれました」「たいくつを感じるひまもなくよかったです。沢山いただいた資料を帰ってからしっかり読もうと思う」「歴教協のフィールドワークらしいもので、今年のコースは大満足」「戦跡と他の地域の文化財をセットにした『地域づくり』の観点が最大の収穫」。

各地の現地見学に参加したり、企画する立場にある目が肥えた歴教協のメンバーの参加者から、過分な褒め言葉や温かい励ましをいただき、安房支部（NPO）のメンバーは大いに力づけられた。

# 地域実践報告をして

浅尾弘子（千葉支部）

推薦してくれた県歴教協のみなさんががっかりしないように、自分なりにがんばったつもりです。リハーサルでアドバイスをしてくださった方々をはじめ、たくさんの方たちの協力を本当にうれしく、ありがたく思っています。

この実践は、単に日本史の授業として実践したものではなく、泉高校で3年間彼らとことん付き合ってきた中での実践です。一人ひとりの生徒の学校での生活だけでなく、家庭状況、アルバイト先まで理解した上での実践です。そういう高校に勤務できたことを幸せに思います。

地域実践報告というのは質疑も討論もなく、聞いてくださった方がどんな感想を持ったのかもわかりません。そこが物足りなりません。しかし、今大会で実践報告をした同僚の前田恒久さんからメールをいただきました。一部転載します。

「①討論が高校生は大好き、と簡単にいえちゃうところが当たり前で当たり前でない。
②歴教協では子ども理解、分析が実践の中で弱いような、あるいは、前面に出ていない感じがしていましたが、浅尾さんの報告の中では生徒の授業認識が出ていたり、浅尾さんの生徒認識が実践の土台にある、感じがしました。
③一番ポイントかな、と思ったのが、映画を見せて、その終わり方に生徒たちが納得してない、そこをみて、そこを生かして、終わり方の違い、時代背景へと発展させた点です。生徒たちの思い、その奥にある問いを感じ取って次の展開を考えたところが、ポイントのように思いました。」

教員生活も先が見えてきましたが、これからも私らしい実践をしていきたいと思っています。ありがとうございました。

# 学生交流会総括

小薗崇明（専修大学大学院）

8月5日に歴教協の閉会後におこなわれた学生交流会では千葉大2名、東大1名、日福大2名、立命館大2名、早大3名、計10名の学生が参加した。それぞれ歴教協に参加した感想と課題について述べてもらった。

感想で皆共通して述べていたのは、歴教協で授業実践を語る教員への驚嘆、賛辞である。学生交流会の参加者は教員希望者が多く、教育実習の経験者が多かったが、実習での自分の失敗と歴教協で報告した実際の教員との間に差を感じていた。そのために歴教協に参加して勉強になったと感想を述べる人は多かった。

課題に関しては、司会の私が、どうすれば若い世代の人たちが歴教協に参加するかという問いを出した。その問いに対しては、もっと大学に向けて宣伝するべきだという意見が多かった。

今回初めて歴教協に参加したという学生がほとんどだったが、彼らは大学の先生から直接、歴教協について聞かされ参加したようである。それまでは存在を知らないという人が多かった。私個人的な経験としても、歴教協の会員で地域の掘り起こしをしている人のもとに、学生を連れて行ってフィールドワークに参加したら、その後学生がその地域の歴史に関心をもって卒業論文を書いたことがあった（さらにその学生は今回の歴教協の分科会で報告もした）。歴教協の会員は小・中・高の教員が多いと思うが、大学とつながりをもつことが重要だと思う。大学生は、歴教協の取り組みに関心をもつ可能性が極めて高いからである。

大学生（特に教育系）の参加者を増やすために重要なのは、授業スキルを学べる場所だという宣伝をした方がいいという意見が出た。ナショナリズムとたたかう授業の模索や、現代政治の問題点をいくら宣伝してもあまり学生はついてこないが、うまく授業をこなす方法を教えるという宣伝には学生は関心をもつそうである。

また、学生が経験した教育実習と歴教協で聞いた教育実践との間には大きな差を感じたと先に述べたが、その差を埋めるためにも教員たちの失敗談を聞きたいという意見もあった。学生はすばらしい教育実践を聞くとそれを自分のものにしようとする前に、私には無理だとあきらめてしまう可能性があるのだろう。

最後に歴教協の各分科会で学生たちが見たダメだと思う教員・会員についての意見を挙げる。①普段、学校で注意しているであろう人が居眠りをしている。②議論に白熱して言葉が乱暴な人がいた。③政治色が強すぎて、嫌いな政治家は呼び捨てだが、好きな教員や学者には「先生」をつける。④同じ人が質疑の時間を無視して長々喋る。⑤若手だ、次世代の継承だと期待、応援しながら、その若い人が歴教協絡みで書いた本を買わない。

以上、学生交流会での学生の意見をまとめた。今後の歴教協について考える上でも貴重な意見が出たと思う。今後検討する必要があるだろう。

## ワークショップの反省

小林光代（船橋）

ここ何年か県の研究集会で行っているワークショップを、千葉大会でも行ってはどうかと実行委員会で提案されたのが、今回の開催であった。とはいえ、県内はおろか全国のみなさんへのお知らせもできておらず、やっと「なのはな便り」7号（『歴史地理教育』2012年7月号）で紹介することができた。紙面に書いたようにこれは、参加者に五感を使って体験する中から楽しく学んでもらおうという企画から生まれたものである。レポート発表というやや堅苦しい（？）内容だけでなく、市民や子どもたちも気楽に参加できる催しもあったほうがよいという、会員の声から始まったもので、過去にはいろいろな体験を行ってきた。

今回参加していただいたテーマは「韓国の絵本から見えるもの」（木村さん）、「ベトナムフェア」（関根さん）、「アメリカ占領軍館山上陸のフィルム上映」（安房支部）、「錬金術を体験しよう」（棚沢さん）、「綿花から糸を紡いでみよう」（鳥塚さん）、「南北コリアと日本の友だち展（絵画展）」（金明仙さん）の6体験であった。

特に今回初である絵画の巡回展では大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本、そして在日コリアンの子どもたちの絵が200枚ほど展示され、子どもたちの色鮮やかな絵画は会場を華やかに飾ってくれた。しかも一枚一枚に丁寧な解説が書かれ、熱心に読む人の姿が見られた。金さんは「3カ国の実際の子どもたちの交流は難しいかもしれないが、絵による交流ならばもっと気軽にできるのではないか」と話していた。

開催時間が4日・5日の昼休みのみという短時間だったが、主催者も参加者も十分とは言えないものの満足した催しだったと思う。特に県外からなどの初参加者は興味深そうに見たり、聞いたり、体験したり、知ったりで、笑いあり、驚きあり、9月からの授業のヒントを得たりと、短い時間を楽しんだり学んだりしてもらえたと思う。

反省点としては、①会員のみなさんにもっと早い段階から支部活動を通して呼びかけるべきだったと思う。いつも参加していただく方々に頼ってしまった。②当日のブースごとの参加人数や、どのくらいの時間を費やしたのか、どんなことに関心をもったのか、どんな会話が行われたのかなど、声の集約を行って

いなかった。今後継続のためにも客観的な資料を残すべきだった。③開催の必要経費を聞かず、一律1000円の支払いにしてしまった。経費を聞くべきであった。

## 学生スタッフが活躍した千葉大会

楳澤和夫（千葉県歴教協事務局長）

全国大会千葉大会では「ボランティアスタッフ」のカードを付けた学生の姿が多く見受けられたと思います。18の大学と二つの短大、三つの専門学校の学生たち56名がボランティアスタッフに登録し、3日間で延べ105名が、受付や道案内、会場の設営などの大会運営に協力してくれました。4名以上の学生が参加した大学は、筑波大8名・早稲田大6名・千葉大5名・帝京大5名・国士舘大4名でした。歴教協の会員の中の大学教員が授業で、高校の教員などが教育実習生に呼びかけて組織化しました。

このボランティアスタッフの制度は、毎年冬に開催している千葉県の集会（千葉県歴史教育研究集会）での取り組みがベースになっています。例えば、全国大会のプレ集会と位置づけた今年1月の集会では、参加者152名のうち学生が61名（うちボランティアスタッフ47名）に達し、参加者全体の40%を占めました。これは教員や一般市民の参加者を上回る数字です。

多くの学生が参加する理由ですが、まず、集会の参加費（1000円）が無料で、2日間の集会の昼食（弁当）を支給していることがあげられます。しかし、これで学生が集まってくるわけではありません。学生が集まる最大の理由は、ボランティアスタッフを集会運営の要員として使うという発想ではなく、講演や分科会など集会のすべてのプログラムに参加してもらうということを前提条件にして、募集しているからだと思われます。つまり、仕事をしてもらうのではなく、学んでもらうことを第一に考えているのです。しかし、参加費を無料にしても、参加する学生が増えるとは限りません。無料にすれば、参加しても参加しなくてもよいと考えがちですし、参加してもらえるかどうかも不確定です。そこでボランティアという名目で仕事を割り振ることで、参加しなければならない状況を作っているわけです。

学生の参加者が多い、もう一つの理由は、学生を報告者としたことです。卒業論文や教育実習の模擬授業などを支部の例会で報告してもらい、そこで検討を加え、県の集会の分科会で再度報告してもらうようにしました。1月の県集会では32本のレポートのうち7本が学生のレポートであり、報告者の学生がそのままボランティアスタッフとして活動しました。また、夏の全国大会では千葉県から56本のレポートが報告されましたが、そのうち6本が学生の報告です。報告する学生は、必ず自分の友人を集会や大会に連れてきてくれます。こうしたことも学生参加が多くなった理由です。

このような今までの取り組みを踏まえて、全国大会でも同様の取り組みを本部に要望しました。結局、ボランティアスタッフの参加費が500円となり、千葉県歴教協がスタッフ全員分の参加費を負担するということになりました。千葉県歴教協ではこれを将来への投資であると考えています。

学生参加の増加は、歴教協の活動に興味関心を持っている学生が増えていることを示していますが、一方で課題もあります。最大の課題は、学生であるがゆえに活動への定着が見られないことです。今後は参加者の追跡調査を行い、教員になった場合は、各県歴教協へ申し送るなどの体制づくりを行っていきたいと考えています。

## 速報室のIT化が必要―歴教協千葉大会に参加して―

三橋尚子（ボランティアスタッフ）

歴教協千葉大会に写真係として参加し、速報づくりにも携わった。速報室には多くの学生ボランティアが手伝いにきてくれ、速報の原稿となる各分科会の感想用紙を配布・回収したり、集めてきた用紙の文章をパソコンに打ち込んでくれたりと活躍していた。参加者の先生の教え子で頼まれて来た人や、教育に興味のある学生など、若者たちの参加の動機はいろいろだったようだが、みな責任感をもってやっていた。

写真を撮るために各教室を回ったが、それぞれの分科会に特色があり、興味深かった。発表者が黒板に大きな地図を張り説明している教室、机をくっつけて円形にして資料を回しながら発表している教室、班ごとに話し合いの時間を設けている教室などさまざまだった。すべての教室の発表が成功しているとは言えず、質問を受け付けても誰も手を挙げなかったり、意見を述べすぎて紛糾し雰囲気が悪くなっているところもあった。

回収された感想用紙を見れば、やはり「この話を聞けてよかった」「内容がよく理解できなかった」など分科会によって意見も違っていた。完璧な発表はなかなかないだろうし、否定的な意見を聞くことも授業をつくるうえでは必要だと思うから、それはそれでいいのだろう。

速報づくりおよび実行委員として動いた中で、気になった点をあげる。一つは、速報にもお詫びが出ていたが、千葉大学内の案内についてあまりにも不備が多かったことだ。地図や案内板の設置・配布が少なく、校舎ごとの移動の仕方がわからない、今いる場所がどこなのかさえわからない、という意見が多かった。校舎内の廊下を歩いていても、何度も道を聞かれた。案内の看板や張り紙は、くどいくらいに用意すべきだと思った。

もう一つ大きな問題だったのは、速報室のハード面（IT）の弱さだ。パソコン3台（うち1台は年代物）とプリンタ1台ではいくら人員がいても仕事がはかどらない。学生ボランティアの高校生が速報の挿し絵を描いてくれたがスキャナがなかったため、絵をデジタルカメラで撮って画像として貼りつけるというアナログな手段しかとれなかった。千葉大学構内には「wi-fi可能」のステッカーが貼ってある教室がいくつもあった。しかし、速報室にはインターネット環境がなく、学生ボランティアに打ってもらったデータは逐一USBメモリーに保存して他のパソコンに移すなど、時間のロスが多かった。今の時代、iPadなどのタブレットやルーターなどを持っている人も少なくないだろう。そもそもインターネット環境があれば、感想の紙など配布しなくてもメールで送ってもらえて、手書き原稿を打ち込む時間も省け、連絡事項（地図だってカラーで）も送ることができる。紙の無駄も省ける。各学校にはIT化の波が押し寄せているのだから、今回のような場にも取り入れてはどうだろうか。

分科会は未来志向の授業をめざす発表が多かったが、裏方は旧態依然としたやり方だった。歴教協の大会は歴史のあるイベントだが、歴史にあぐらをかくのではなく、いいもの・便利なものを評価して時代に合わせて進化していく必要もあると思う。またそれは、新戦力となる若い参加者が筆頭になってやるべき仕事だろう。

### 千葉県歴教協の集大成が 1枚のDVD（2012年改訂版）になりました

このDVD（「わたしたちの歩み　2012年改訂版」）は、私たち千葉県歴教協の1954年からの、およそ50余年にわたる歴史と言っても過言ではありません。千葉県歴教協の会員であっても初めて見る会報や会誌および『100時間』『100話』など絶版の書籍を集録することができました。

私たちは、21世紀を迎えながら、歴史教育・社会科教育のために、地域や子どもたちに根ざした活動をさらに続けていこうと考えています。そのためにも、過去に、千葉県歴教協の会員たちが何を語り、どのような実践を積み重ねてきたかを知らなければならないと考え、DVDを製作するに至りました。

全国のなかまたちとともに、私たちの活動をふり返り、財産となることを期待しています。

このDVDをご希望の方は事務局までご連絡ください。1枚千円です（郵送料含む）。（M）